

“tantas cosas…”

話したいことはたくさんありますが…

— ペドロ・アルペ神父物語 —



李 聖一 S.J.



“tantas cosas・・・”  
話したいことはたくさんありますが・・・  
ーペドロ・アルペ神父物語ー

---

---

はじめに .....	2
序 章 あの日の広島.....	3
第一章 生い立ちとイエズス会への召命.....	9
第二章 日本にて .....	14
山口へ／修練長として／管区長として	
第三章 総長として.....	29
31総会／32総会／第四誓願／イエズス会員のアイデンティティ	
第四教令／“Men for Others”／イエズス会の源泉／	
愛に根ざし、愛に基を置いて／私たちの行動様式	
第四章 “tantas cosas・・・” .....	52
33総会／総長辞任／“nunc dimittis”	
あとがき .....	63
参考文献	





---

## はじめに

---

私はペドロ・アルペ神父に出会ったことも、遠くからその姿を見たこともない。私がイエズス会に入会したのは1976年。その頃、アルペ神父はすでにイエズス会総長であった。総長職を18年に及んで担った間に、彼は一度だけ、1971年に来日した。日本にあるイエズス会の事業体や共同体を訪問し、広島にも足を踏み入れたという話を聞く。私はその時16歳だったので、そんなことがあったと記憶していてもおかしくないのだが、何の記憶もない。「アルペ神父さま」という言葉は母から何度も聞かされた。修練院があった長束での彼の様子やエピソードなど、とくに、原爆投下後の精力的な働きをそばでじっと見ていた母の記憶は、年老いても薄れることはなかった。

いったいどんな人だったのだろうか？素朴な疑問をもちながら、イエズス会に入会し、養成を受け、司祭となり、もうそろそろ自分のイエズス会における役割と務めを終えてもいいような時期を感じ始めたとき、アルペ神父について何か書き残しておきたいと思った。それは、私自身のイエズス会における生涯を振り返ってみるとき、彼が導いたイエズス会総会の教令、数々の書簡や講演録などに大きく影響されたと思うからであり、自分の持つイエズス会に対するイメージの根本を形成し、そのイエズス会の過去を探り、現在を生き、未来を模索することが自分の最後の働きではないかと感じたからである。

アルペ神父の伝記はすでに多くあり、その生涯の足跡を描いたDVDも製作されている。これ以上、彼について書き残す必要はないであろう。それでも私自身のために書いてみようと思った。それだけである。その意味では、これはかなり私的な「アルペ伝」である。それゆえ、「物語」でもある。



---

## 序章 あの日の広島


---

1945年8月6日の朝、いつもと変わらぬ夏空の、今日も暑くなることを予想させる日であった。午前8時過ぎ、アメリカの爆撃機B-29が一機、不気味な爆音を響かせて広島上空に近づいていた。実は、その1時間前、広島に空襲警報が出ていた。しかし、すぐに解除になり、市民は普段通りの日常の生活を始めた。仕事に行く者は電車やバスに乗り、店を始める者はその準備に取り掛かり、勤労奉仕に狩り出された学生・生徒も歩いたり自転車に乗ったりして、その場所に向かっていた。ちなみに、私の父は、当時国鉄の機関士をしており、その日は夜勤を終えて、午前8時には相生橋を電車で通りすぎ、南観音町の家に戻り、仮眠を取ろうとしていたという。

8時15分、エノラ・ゲイ号から一発の爆弾が広島市の街に投下された。現在の平和公園内に残された原爆ドームから数10メートル離れた原病院の上空約600メートルでその爆弾は爆発。ピカッと光線が走り、数千度の熱風が一瞬にして市街地を吹き蓋い、そしてまさにきのこの形をした爆煙が天上に向かってもくもくと上がっていった。

いったい何が起こったのか。木造の家屋は言うに及ばず、コンクリートの建物も跡形もなく崩れ去った。数キロ先の家の瓦は吹っ飛び、壁も崩され、家そのものが傾いた。産業奨励館として威容な姿を誇ったあの原爆ドームの様子を見れば、一発の爆弾から発せられた熱線と爆風のすさまじさは容易に想像できる。翌日の新聞では「新型爆弾」としか表記されなかったが、それが原子爆弾であったというのは、もう少し後のことである。

人間はどうなったのか。あの熱線で焼け消えてしまった人がいる。市内中心部にある銀行の壁に人の影だけが残った跡がある。そこに人が座っていたのであろう。しかし、それ以外何の跡もない。多くの人の肌は焼けたただれ、行き倒れ、一瞬にして命を奪われた。息も絶え絶えになった



人は、「水、水、・・・」と言って息絶え、水を求めて川に向かった人はその場で命が尽きた。

原爆直後の様子を描いた絵はたくさんある。生き残った人がその時の状況を語った映像もある。どれも悲惨で、目を覆いたくなるほどである。語り部たちの証言もそんなこと信じられないと思うほどの内容である。「人が住んでいるところにあんなもの、落としちゃいけない。」ある語り部の言葉である。

広島市内から数キロ北の方に、武田山という山がある。標高 400 メートル少しだが、瀬戸内にある広島の山としては高い方で、それなりに目印になる。その麓の長束という所にイエズス会の修練院があった。修練院というのは、イエズス会の入会を志した者が最初の 2 年間で過ごす所で、イエズス会員になるにふさわしいかどうかを試される場所である。建物は 1938 年に建てられた。日本の家屋風に建てられ、屋根には瓦が葺かれている。50 畳ほどの畳敷きの聖堂もあり、アンジェラスの鐘を鳴らす鐘楼もあって、それは五重塔になっている。日本の文化を尊重するイエズス会はあえて日本風の建築様式にならって修練院を建てたのである。

その修練院にペドロ・アルペ神父というスペインから来た宣教師がいた。修練長であった。修練者は 20 代の日本人がほとんどであったが、ドイツから来た神学生で哲学を勉強している者もいたし、修練を終えてラテン語やギリシア語の勉強をしている者もいた。朝鮮半島から来た若者も 3 人いた。全部で 35 人の若者が生活していた。朝 5 時に起床し、祈り、ミサにあずかり、朝食を簡単に取った後は、講義、読書、昼食、作業、そしてまた祈り。夕食後も読書、祈り、講義と、ほぼ沈黙の日々を過ごす。

そんな場所にも、あの日の朝、突然の異変が襲った。修練院は爆心地から 6 キロほど離れたところにあるが、爆風で窓も壁も、屋根瓦も吹き飛ばされた。家の梁が今にも崩れ落ちてきそうになった。アルペ神父は自室にいたが、何が起きたのかと修練院の小高い丘に登った。そこから



見えたのは一瞬のうちに瓦礫となり、灰燼に帰した広島街であった。

原爆投下後、すぐには広島街の中心街に入ることはできなかったが、夜の10時頃、街の中心部にある幟町教会にたどりつくことができた。教会堂は何とか建っていたが、そこに住んでいたラサール神父やクラインゾルゲ（高倉）神父は近くの縮景園に避難していた。ひどく負傷していたので、アルペ神父は彼らをすぐに長束に連れて行き治療した。それと同時に、悲惨極まりない様子を目の当たりにして、彼が取り組んだのは、修練院の聖堂を急遽、救護施設にしたことだった。何人もの人がやけどを負って、自分の家に帰ろうとする。途中で息を引き取る者もいたが、何とかたどりつく者もいた。長束は川をひとつ越えれば広島に入れる。瀕死状態の多くの人々が修練院の下の道を歩いていたのである。


アルペ神父はあとで少し詳しく述べるが、医学部出身であった。昼の聖堂に傷ついた者たちを運び入れ、治療に当たった。すぐに150人以上の負傷者が集まり、急ごしらえの聖堂は足の踏み場もないほどになった。やがてこの診療所の噂を聞きつけた人々が負傷者を連れてくるようになった。また、動けない人のところにはアルペ神父自ら出向いていった。最初は、修道院にあったヨウ素やアスピリン、炭酸ソーダを使ってやけどの治療にあたる程度であった。ところが、修道院で働いていた人が小さな瓶でいっぱい袋を持参し、これがやけどに効くかどうかかわからないが、何かの役に立てばと言って、アルペ神父に渡した。それはホウ酸で、傷口をきれいにして痛みを和らげることができるものであった。これが効果的で、この診療所で手当てを受けた者は誰ひとり死ぬ人がいないという奇跡的な状況を生んだ。「摂理的に」とアルペ神父は言うが、15キロものホウ酸が入った袋だったのである。

このような様子を見近に見ていた私の母は、「あの神父さんは聖人じゃわ」というのが口ぐせであった。

母は、原爆投下当時9歳だった。南観音町に住んでいたが、厳しくなる戦況下、子どもは田舎に疎開させるということで、廿日市の親戚の家にしばらくいた。しかし、家が恋しくて、実家に戻ってしまうこともあつ







たらしい。あの日の前日もそうだった。そして、廿日市に行つとけという父の言葉に泣く泣く、次の日の朝、己斐の駅に向かった。そしてそこで原爆に遭う。「何があったんじゃろ」、何も想像できないまま、家のことが心配になり、再び実家に向かう途中、福島川の橋で知り合いのおじさんに出会った。出会うなり、「静子、何しとるんじゃ！家には帰るな！すぐに廿日市に行け！」と怒鳴られたという。仕方なく、とぼとぼと廿日市に向かった。途中、子どもを抱いた母親が倒れこみ、「水、水、・・・」とうめく姿を目撃したという。「苦しうじゃねえ、でも何してあげてええんか分からんねえ」と、その姿を横目で見ながら通り過ぎた。

母には7つ上の姉がいた。すでに16歳であったため、勤労奉仕のために宇品の方に出かけていた。あの日も同様に、宇品に行き、そこで被爆した。何日も家に帰ってこなかった。案じた祖父は探し回った。あまりにも多くの死体があり、トラックの荷台に乗せて広場に集められ、まとめて焼却されたという。祖父は、トラック一台一台の荷台に上がっては、娘の遺体を探した。しかし、見つからなかった。その姉が1週間ほどたつて、廿日市の家に戻ってきた。よろよろと、線路の上を伝って歩いて帰ってきたのである。娘の姿を見るや、祖父はすぐに寝かせ、ひどいやけどを負っているのを見て、母に言ったという。「静子！田んぼに行つて、あおさをとつて来い！」。やけどにはあおさが効くことを祖父は知っていた。朝鮮半島の人間なら誰でも知っている葉草療法であった。しかし、介護の甲斐もなく、姉は次第に息を弱らせていった。最後に姉は祖父に願った。「桃が食べたい・・・」。その言葉を聞くや、祖父は急いで古江まで出かけた。古江は今でも少し残っているが、いちじくやびわの産地である。果樹園が多く、そこに行けば桃が手に入ると祖父は考えたのであろう。しかし手には入らなかった。数時間たつて、祖父はみかんの缶詰をひとつ持って帰つた。「桃はなかった・・・」と言って、瀕死の娘に食べさせた。そして静かに姉は息を引き取つた。その様子をじっと見守っていた母は、その後一切、桃を口にするこはなかった。私は桃が好きで、「お母ちゃん、桃が食べたい」というと、桃の皮を剥いてくれたが、母が食べるこ

とは決してなかった。


姉が瀕死の状態に戻ってきたとき、母はすぐに長東に向かって走った。長東から廿日市まで約20キロはある。まだ9歳の女の子は必死に走った。神父さんに来て祈ってもらうためである。すでに述べたが、長東には3人の朝鮮半島出身の神学生がいた。そのうちの一人、陳原のぶはら（陳聖萬）神学生は、祖父と懇意であった。母は陳原神学生を呼びに行くために、長東に走らされたのである。姉は終油の秘跡（現在では、病者の塗油）を受け、静かに亡くなった。



（被爆者の手当をするアルペ神父）

この時、アルペ神父の手当を受けて一命を取りとめ、後広島教区の司祭になった人がいた。長谷川儀ただし神父である。彼は私たち家族とも親しく、原爆体験とアルペ神父との出会い、そして司祭の道を歩み始めた話をよく聞いたものである。長谷川神父が被爆したのは、爆心地から2キロ離れた太田川沿いある学校の近くである。学校警備隊の奉仕に狩り出されていた。8時前に空襲警報が鳴ったものの、すぐに解除されたので、仲間といっしょに川で泳いでいたという。8時15分、爆弾が投下されると、突然の目の前が暗くなり、4000度の熱風を浴びてしまった。「熱さと痛さの入り交じった感覚が全身を駆け巡った。紛れもなく、その一瞬で私の体の後半分を完全に焼き焦がされた」と言っている。家も失ってしまったが、幸いにも、両親と出会うことができ、やけどに油を塗る程度ではあったものの、手当てを受けることができた。その後、偶然にもアルペ神父





が治療を行っていた長束修練院のことを聞きつけた。長束まで移動することも困難であったので、長谷川神父の父親は長束まで駆けつけ、息子の容態を説明すると、アルペ神父が駆けつけてくれたそうである。死の淵を何度もさまようような状態に陥ることもあったが、まさに九死に一生を得たのであった。このような出会いを経て、長谷川神父は高校を卒業し、健康にも自信を持つことができるようになると、司祭への道を志すようになった。そこでアルペ神父を訪ねて、司祭になりたいという話をした。その時アルペ神父はこう言った。「第一にあなたの信仰です。信仰がなければ司祭になっても役に立ちません。第二は知恵です。信者や未信者の方々を導くために、お祈りを通して神様からいただく知恵がなければ、ふさわしい牧者になれません。第三は健康です。神の国の完成のためには戦いが必要です。私たちは『戦いの教会』の中に生きるのですから、体が丈夫でなければ続きません。」この言葉に励まされ、1956年に東京の神学校に進み、9年後の1965年、司祭叙階の恵みを受けた。その頃、日本管区の管区長になっていたアルペ神父は長谷川神父のもとを訪れ、カリスとパテナを差し出し、「毎日のミサをこれで捧げ、私のためにもお祈りしてください。これは叙階記念のプレゼントです」と言って手渡した。この後しばらくしてアルペ神父はイエズス会総長に選出された。

長束修練院の聖堂で手当てを受けた負傷者は200人を越える。アルペ神父自身被爆者であり、原爆の惨状を目の当たりにしながらも、その壮絶な状況に立ち向かったのであった。その後、彼は何百回もこのことを語り続けることになるが、同時に、アルペ神父を語るには、この出来事を避けて通ることはできなくなるのである。そのことに関しては、修練長として、また、管区長としてのアルペ神父について述べるときに触れることにする。



## 第一章 生い立ちとイエズス会への召命

---

スペインの北部にビルバオという都市がある。私たちが世界地理を学んだ頃は、鉄鉱石の産地でスペイン最大の工業都市であると習った。地図帳でその場所をよく確認して試験に備えたものである。アルベ神父の出身地であることはもちろん後で知った。

ピレネー山脈の麓の地域を「バスク」という。フランス側を「フランス・バスク」、スペイン側を「スペイン・バスク」と一応分けて呼ぶ。イエズス会の創立者聖イグナチオ・ロヨラは「スペイン・バスク」の出身である。ピレネー山脈を越えればフランスである。険しい峰の連続とはいえ、この山脈を越えてスペインを支配しようとする野望はヨーロッパの歴史においては何度もあった。

ローマ帝国時代のポンペイウスがその最初の人物であったが、バスク人には大いに苦しめられたらしい。パンプローナというナバラ州の首都があるが、これはポンペイウスという名前に由来する。ハビエル城に行く高速道路の途中に、ポンペイウスの軍隊が入り込んだという狭隘の谷を見ることができるが、よくそんなところから攻め入ったものだと感心する。それほどに攻め込むのがむずかしかったのであろう。

カール大帝もスペインを狙った。しかし、バスク人は動きに敏捷で、地の利もあって、カール大帝の軍隊を大いに悩ます。「バスク族」という言葉が最初に出てくるのは、このカール大帝についての書物である。

16世紀にも、フランスのフランソワ一世はスペインを自分のものにしようとした。しかし、神聖ローマ皇帝であり、スペイン王であったカール五世によって阻まれる。その戦いのなかのひとつの局地戦であったが、パンプローナの戦いに聖イグナチオは従軍し、奮戦したものの足に砲弾を受け、療養生活を送る。その時、回心し、イエズス会創立にいたったという話は有名である。

ビルバオもバスク地方に属す。そのためか、聖イグナチオのデス・マ  
スクから窺える顔とアルペ神父の顔はよく似ている。とくに鼻の高さが  
特徴的である。



聖イグナチオ・ロヨラとアルペ神父

アルペ神父は1907年11月14日、父マルセリーノ、母ドロレスの  
もとで生まれた。父方の祖父ホアン・アントニオは医師であった。アル  
ペ神父が若い頃、医師を目指したことと何らかの関わりがあるかも知れ  
ない。アルペ神父の上に姉が四人いた。生まれた日の翌日、ビルバオの  
カテドラル、サンチャゴ大聖堂で洗礼を受けた。ペドロという洗礼名が  
つけられた。

9歳の時に母を、19歳の時に父を亡くしたアルペ神父は、1926年の  
夏に姉たちと一緒にルルドを巡礼した。この時、車いすに乗った少年が  
ルルドの泉に身を浸したとき、治癒の奇跡が起こるという場面を目撃し  
たという。すでにマドリッド大学の医学生であった彼は、この時から司  
祭の召命を感じ始めた。

ルルドというのはフランスのピレネー山脈の麓、オクシタニア地方に



ある小さな村である。その村のひとりの少女ベルナデッタに聖母マリアが現れ、「わたしは無原罪のマリアである」とのお告げがあったと言われている。


カトリック教会には「原罪」という教えがある。アダムとエバが犯した最初の罪（原罪）の結果（死）をすべての人間は背負わなければならない。洗礼によってその原罪はゆるされる。しかし、その結果は残る、という教えである。「無原罪」というのは人間として生まれる瞬間からその原罪を免れているという意味で、聖母マリアはそうであるという教えで、19世紀に大いに議論された。ベルナデッタへのお告げに対する信ぴょう性が検証され、最終的には教皇が不可謬権、つまり教皇の荘厳な宣言には誤りがないという教えを行使してカトリック教義として成立した。聖母マリアはその母アンナが受胎した時から原罪を免れていたということが教義として宣言され、カトリック世界においてマリア信心が大いに盛んになった。

今でもルルドには世界中のカトリック信者が訪れている。多くの病者は癒しを求めてルルドの泉に体を浸したり水を飲んだりする。いつもというわけではないが、実際に癒される人もいる。巡礼客は「ルルドの水」を求めて持ち帰り、病者の口に含ませることもよく行われる。

1927年、医学部の4年生であったが、アルベ神父はイエズス会に入会し、ロヨラにあった修練院の門を叩いた。イエズス会入会者は初めに2年の修練を行い、その後、ラテン語やギリシア語を含めて人文学を学び、さらに哲学、神学の課程を修めて司祭となる。最後に第三修練を終えて、一人前のイエズス会員となる。平和な時代であれば、自分の国ですべての課程をこなすことができるが、アルベ神父の時代はそうではなかった。

ヨーロッパの近代は、王政を否定して国民国家を樹立することによって始まる。1789年のフランス革命がその画期的な出来事であった。し





かも、その動向は、王政との強いつながりをもっていたカトリック教会を否定する潮流を生み出していった。教皇への従順や王室の庇護のもとに発展していったイエズス会は、近代化を進めようとする政治勢力にとっては、何よりも排除しなければならない存在であった。それゆえ、1773年にイエズス会は解散させられ、その財産は奪われてしまった。1814年に再興されるが、それは、急激な近代国家の成立によって生じたひずみを利用するような形で王政復古が行われたり、ナポレオンによって新たな専制国家が生まれたりしたからである。20世紀になると、共産主義が台頭してきて、資本主義とは対極の国家や政権が誕生する時代が生まれてきた。また、ファシズムが台頭し、独裁国家も現れるようになった。そうした時代の波をスペインも受け、共産主義を標榜する政権が樹立したり、王政が復活したりする時代を迎えるようになる。そのような対立が生まれ、不穏な空気が頂点に達するころにアルベ神父はイエズス会に入会したのであった。

入会して5年後、イエズス会はスペインから追放されてしまった。1936年に人民戦線政府が成立するのだが、それに先立って、王政と王政を支えるカトリック教会に反発する人民戦線は、カトリック教会の急先鋒に立つイエズス会をスペインから追放したのである。それにともない、アルベ神父はベルギーへと脱出し、さらにオランダに行って哲学と神学の勉強をし、1936年に司祭に叙階された。そして1年後、アメリカにわたって勉強を続けることになるが、その頃、祖国のスペインでは、人民政府が成立するものの、それに反対する陸軍将校たちの反乱が起こり、内戦が勃発するのである。

反乱軍を率いたのはフランシスコ・フランコ将軍であった。この内戦は、第二次世界大戦を引き起こす可能性を秘めていた。ドイツのナチス党が台頭してきた頃であり、イタリアにもムッソリーニが率いるファシズム政党が力を得ていたのである。ロシアが人民政府を支援し、ヒットラーやムッソリーニがフランコを支援するとなれば、それはそのまま第二次世界大戦を生む構造をなすのである。イギリスやフランスがこうした対立にどのように対応するのか、ヨーロッパ全体を一挙に緊張させる状況



を生み出したのであった。

約3年におよぶ戦闘の末、フランコが率いるナショナリストの勝利で終わるが、家族同士、兄弟同士、親戚同士で戦い、血を流すという悲惨な姿が各地で見られ、今でもスペイン人の心に大きな傷跡を残している。

フランコは「超カトリシズム」を掲げていたため、バチカンはいち早くフランコ政権を承認し、ファシズム国家として台頭してきたドイツやイタリアも続いた。スペインのカトリック信者も歓迎ムードではあったが、イギリスやフランスは沈黙したままだった。

アルペ神父は、後年、1946年であるが、『共産主義の実相』という本を著している。戦後の日本にも、共産主義運動が高まる気配を示し始めた頃で、アルペ神父はいくつかの学校で、共産主義とは何かについて語った。それを元に一冊の本にまとめるよう依頼があったのである。彼は、ヨーロッパの歴史のなかで、古代ギリシアの時代から共産主義というものがあつたこと、人間の自由を謳いあげたルソーの思想、マルクスやレーニンの共産主義、その政治的な実現としての政治運動などを、自身が経験したスペインでの出来事を交えて語っている。







## 第二章 日本にて

---

### 山口へ

1938年、アルペ神父は日本に来た。アメリカに渡って最後の勉強を終え、イエズス会員を養成するうえで最後となる第三修練が終了したときであった。なぜ日本という宣教地に行こうとしたのか、諸説ある。本人が行きたかったから志願したという説もあれば、イエズス会本部が派遣したという説もある。当時の日本のイエズス会は、1908年に3人のイエズス会が再来日し、1913年に現在の千代田区紀尾井町に土地を得て上智大学を設立する。その後ドイツ西管区が担当する宣教地となり、ドイツ人宣教師が多く派遣され、大学経営をはじめ、中等教育も行うようになる。最初の学校は六甲学院で1936年に創立された。1934年には、スペインのトレド管区も日本での宣教、とくにザビエルが宣教活動をした山口地域の責任を持つことになった。アルペ神父はカステーリア管区に属していたので、総長はアルペ神父を日本に派遣するさいに、次のような手紙を書いた。「日本への派遣のため、最終的にはトレド管区所属となるが、一時的にドイツ西管区に所属せよ。」このあたりの事情は、宣教地がどこの管区に委託されているかというイエズス会の統治の問題になるが、筋を通しておこななければならない。それはイエズス会特有の従順の誓願に関わるからである。

日本に到着したアルペ神父はまず東京で日本語を学んだ。しかし、山口教会の主任司祭が聖堂建設のための寄付金を募るためにスペインに行くことになった。そのため、アルペ神父は急遽山口に派遣されることになったのである。日本語も覚つかず、まだまだ不慣れな日本でしかも田舎の町に行くということで、大きな不安を抱えての山口行きだった。

しかし、アルペ神父は精力的に働いた。とくに若者と積極的に関わった。



このとき、アルペ神父に出会い、その人柄に感化されてイエズス会を志した者も少なくない。彼らはその後、アルペ修練長のもとで修練を受け、イエズス会日本管区のために重責を担う会員となっていくた。

1941年12月8日、日本軍の真珠湾攻撃により、太平洋戦争が勃発。すでに陸軍は中国大陸や南方の島々に進軍しており、アメリカ、イギリスを相手にした戦争が始まったのである。この日、アルペ神父は突然憲兵隊に連れて行かれた。スパイ容疑である。

日本は、ドイツ、イタリアとは三国同盟を結んでいたもので、ドイツ人やイタリア人はスパイの対象とはならなかった。アルペ神父はスペイン人ではあったが、アメリカで勉強したことがあり、そのためにスパイ容疑がかけられたのである。約一か月におよぶ投獄、凍えるような寒さの独房、厳しい尋問、まだ理解不十分な日本語、などなど。アルペ神父は後日、この時の体験を回顧して次のように語っている。

「ベッドもなく、机もなく、寝るための畳以外に何もなく、12月の寒さの中で、何昼夜もたった一人で過ごしたのです。刑務所に入れられる理由がさっぱりわからなかったので私は苦しみましたが、この時私は多くのことを学びました。それは静寂、一人でいること、苛酷で厳しい貧しさ、「私の魂に訪れる来客」との心の中での会話といった学びです。私の全人生を通して、これが最も教えられたことの多い時間であったと思います。」

## 修練長として

山口での投獄生活を終え、アルペ神父は広島にある長束修練院の修練長として派遣されることになった。

イエズス会に入ると、最初に2年間の修練を受ける。修練院は“domus probationis”（試みの家）と呼ばれ、入会者がイエズス会にふさわしいかどうかを試される。おもに5つの“experimentum”（実習）が課され



る。聖イグナチオの『靈操』に基づく 30 日間の黙想が一番大切であるが、そのほかにも台所実習とか病院実習などがある。私たちの時代には教会実習もあった。かつては巡礼実習というものもあり、1 銭も持たずに巡礼地に行く。こうした実習をとおして修練者は試され、二年間の修練の後、イエズス会員になるにふさわしいと判断されると初誓願の許可が下りるのである。



(長束修練院とアルペ神父)

この頃、ドイツ人の宣教師たちはいち早く、キリスト教を日本文化に適応させる努力をしていた。キリスト教を宣教地に根付かせるために、その土地の文化を取り入れるという方法は、16 世紀にはイエズス会は先駆けて行ってきたことで、それはマテオ・リッチの中国宣教における方法であったことはよく知られている。日本でも、バリニアーノは日本文化に合わせる宣教を試みた。茶道の所作に基づく「礼法指針」をつくったり、修道院に茶室を設けたりした。日本宣教地区の責任者であったラサール神父(日本国籍を取得してからは愛宮真備)は、禅の修行方法を靈操の祈りの方法に取り入れ、自らの禅体験を通して、禅をキリスト教国に積極的に紹介した。広島可部の可部というところにキリスト教的な禅体験を行う施設も作った。ダム建設のために場所を移すことになり、それは現在、東京多摩の秋川に神冥窟という禅の様式に則った黙想の家になっている。



アルペ神父は修練院で茶道を取り入れた。週に一度茶道の先生が来院し、修練者に茶のお手前や作法を教えた。修練院に茶室はなかったが、畳み敷きの大部屋があり、そこで手ほどきを受けた。

アルペ神父の祈りの姿勢を写真でよく見かけることがある。それは正座して首を少し下向きにし、ひざの上に手を置いている姿である。日本式の祈りの姿勢といってもよい。後年、総長になったとき、その執務室の横には個人的な祈りの部屋があるのだが、そこには畳みが敷かれていた。

アルペ神父が修練者に求めた大切なことは「謙遜」であった。イエス会は自らを“*minima societas*”（いとささやかな会）と言う。聖イグナチオは『靈操』のなかでも「謙遜の三段階」という靈操を与え、謙遜であることを大事にした。修練において学ぶべきことは、イエスがそうであったように「身を低くする」ことであった。そのために、当時の修練者たちは「馬糞拾い」をさせられたという。その頃の広島には物を運ぶために馬がまだ使われていて、道路には馬糞が転がっていた。

アルペ神父から修練を受けた先輩会員たちは一様に「アルペ修練長は厳しかった」と口を揃えて言う。それだけ言って口をつむぐ先輩もいた。修練長の部屋は夜遅くまで電気がついており、朝3時か4時にはもう電気がついていたという。黒いスータンに身を包み、暁の聖堂で静かに祈る人。そのような姿を修練者たちは眺めていたのであろう。





しかし、こんな茶目っ気たつぷりの逸話もある。ある修練者が入会する前、アルペ神父といっしょに長束から三篠教会に行くことになった。5キロほどの道のりで、自転車で行くことにした。修練院が建つ丘の麓に山本川という細い川が流れている。川幅は10数メートルである。アルペ神父は突然、「川の土手を走る競争しよう」と提案した。彼は驚きながらも、素直に「はい」と答え、競争が始まった。20歳そこそこの若者は、「アルペ神父に負けるはずがない」と思って、スタートが切られた。ところがアルペ神父は元気だった。それもそのはず、まだ40歳の後半である。川を隔てて、土手を走るのだが、だんだんとアルペ神父がリードしていった。これでは負ける、と思った瞬間、アルペ神父が「ああっー!!」と声を挙げた。何かと思って横を見ると、アルペ神父の頭の上から黒いものが飛んでいった。愛用のベレー帽だった。その帽子に気を取られている間に修練者は抜き去った。不測の事態が起こったということで勝負なしになったのだとか。



修練長としてのアルペ神父を語るにあたっては、すでに序章でも述べたが、1945年8月6日の原爆投下後、彼が行ったことについて触れなければならない。誰もが口にするのであるが、修練院の聖堂を診療所にして病人の手当てに全力を尽くし献身的に働いた。しかし、後年、原爆の出来事そのものについては激しい心の痛みを感じたという。その痛みをもっとも感じたのは、1950年、「地球を一周半」も回ったとアルペ神父自身が回顧した最初の視察旅行で、コロンビアを訪問した時のことであった。そこでアメリカが製作した原爆のドキュメンタリーを観ることがあった。そのドキュメンタリーはアルペ神父が体験したことそのものを映し出しており、その状況を耐えてきた現実があまりにも重すぎたため、それ以上観ることができなかった。


原爆投下後の翌日、修道院で挙げたミサのことをアルペ神父は、自分が生涯のなかで捧げたミサの中でもっとも意義深いミサのひとつとして語っている。半壊した聖堂には傷ついた人々であふれていた。当時のミサは、司祭は祭壇に向かい、信徒には背を向けて捧げられていた。ミサ中、会衆の様子を見ることはできない形だったのだから、その時ばかりは、アルペ神父は会衆を見た。そして、こう語っている。「祭壇からその光景を見た瞬間に経験した恐ろしいほどの感覚は、決して忘れることはできません。私は動くこともできず、腕を伸ばしたまま麻痺したかのようにそこに立ちつくし、人間が作り上げた科学や技術の進歩が人類の破滅に使われたこの悲劇に深く思いをこらしていました。彼らは皆、苦痛と絶望の眼差しで私の方を注視していました。それはまるで祭壇から何らかの慰めが降り注がれるのを待ち望んでいるかのようなのでした。何と恐ろしい光景なのでしょう。」診療活動はその後6ヶ月続いたが、多くの者が洗礼を受けて修道院を退去していったという。

アルペ神父は、また、自らの被爆体験をもとに、平和のメッセージを熱く語った。そして、次のように述べている。

「原子爆弾の爆発は、私たちが生きるこの時代の一つの象徴である。そ







れは現代の男性や女性の希望と苦悩を表している。ある意味での希望だ。原子エネルギーの発見によって提供される不確かな希望であり、人類が目的達成に手が届く範囲内で、どんな手段をも採ることができるという動かぬ証しでもある。そして、苦悩。政治的国家的な目的達成のために、原子爆弾を再度爆発させようとする国などないと誰が保証できるのだろうか？ 私たちに与えられている人類の経験から、いくつかの国の兵器庫に原子爆弾が存在するかぎり、使用されないという保証はない。それらが使用されないという信頼にたる保証はただ一つ、原子爆弾が存在しないことである。」

このメッセージが今日にも通じることは言うまでもない。

修練長時代のアルペ神父の業績のひとつとして、ザビエル書簡を日本語に翻訳したことを挙げておきたい。日本に最初にキリスト教を伝えた人物として教科書にも登場する宣教師である。アルペ神父は、「日本に始めてカトリックの聖教を伝え、更に鷗州の文化をもたらし、なほ日本人の優秀な本質を始めて鷗州に紹介した聖ザビエルの、精神的姿を、日本の全同胞に知つていただきたい。それには聖人自身の書簡に越したものはなし」と「はしがき」に記している。当時まだザビエル書簡の日本語訳がなかっただけでなく、学問的に校訂された決定的原典となるものがなかった。1945年にシュールハンメル神父がこれ以上ないと言われる検証作業を通してザビエル全書簡集を完成させ、出版された。それを受けてアルペ神父は、ザビエルの日本渡来450年を記念する1949年に、『聖フランシスコ・デ・サビエル書翰抄』を岩波書店から出版した。この本は文庫として出版され、1991年に復刻されたが、今は絶版になっている。のち、河野純徳神父が全書簡を訳出したが、私たちはアルペ神父訳によって、ザビエルの心を知ることができた。格調高い日本語で、共訳者として名前を連ねている井上郁二氏の優れた日本語の感性によるものと思われるが、今は簡単に手にとって読めるものではなくなっている。残念である。



1942年に山口から長束修練院に派遣され、1954年準管区長に任命されて東京に移動するまでの12年間、アルペ神父は広島で過ごした。修練者にとっては修練長であるが、近隣の教会の信者からすれば修道院の院長であり、また、広島・山口地区の司牧責任者でもあった。牧者としてのアルペ神父の姿に触れた人は多い。ただ世を去った人がほとんどで、思い出を語るができる人も高齢となってしまった。2003年に修練院の玄関先にアルペ神父の胸像がつくられた。彼の業績を称えた銘文も刻まれ、後の人びとも知ってもらいたいという思いが伝わってくる。ただ、この像を見た私の母は、「この顔はアルペ神父さんじゃないわ。違う・・・」と言っていた。

## 管区長として


ドイツ西管区、そしてスペインのトレド管区の宣教地区として日本ではイエズス会は大学や中学校の運営をはじめ、中国地方の教会司牧を担っていたが、1949年に準管区となった。アルペ神父は1954年に準管区長となり、1958年に管区に昇格すると引き続き管区長となった。

不思議なことだが、実は、管区長としてのアルペ神父については、彼の伝記や人となりを書き記した記録、またインタビュー集などにはそれほど触れられてはいない。なぜなのか、いろいろな人に聞いてみたのだが、異口同音に言われたのは、海外視察旅行が長かったからだろうということだった。

管区となった日本管区には大きな課題が二つあった。ひとつは、数が増えていく使徒職に対して会員の数を増やすこと。もうひとつは、財政的な基盤をしっかりと作りあげることであった。

この二つの課題を解決するためにアルペ神父が行ったことは、長期にわたる海外視察旅行である。1954年には約1年かけて、アメリカ、スペイン、イタリア、フランス、ドイツ、ベルギー、カナダ、中南米の諸国を歴訪した。管区長になってからも、1958年から59年にかけて半年、





また、1962年には約4ヶ月間、ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカの諸国を訪問している。ローマでは日本の宣教について総長をはじめ重立った会員と協議し、各国を訪問しては日本の状況を伝え、宣教師を募り、そして募金を呼びかけた。とくに広島での被爆体験を語り、その惨状ゆえに核兵器の恐ろしさを語り、平和を訴えるメッセージを何度も語った。

その講演の内容は多岐にわたるのであるが、原爆のこと、戦後の日本の復興のことを、ただ単に現象面のみを語るのではなく、若い頃に医学を志した科学者の目をもって、冷静に現実を分析して語っている。そのことは、1980年のクリスマスから翌年の復活祭にかけて行われたジャン・クロード・リーチ神父とのインタビューで語られた内容が本となって出版されたとき、『回想すること』と題されたアルペ神父自身の回想録も加えられたが、「原子爆弾の中を生き延びる」と「被爆25年後に想うこと」を読めば納得できる。原子爆弾による放射能の影響について、やけど治療に関する観察と方法、戦後の復興とそれを可能にした日本人の精神性など、深い洞察力に溢れている。一節だけ引用してみる。

「愛国心と精神的な理想に根を張りほとんど宗教そのものであった日出ずる国の霊的な力は、潰されてしまった。最も深い部分に横たわる問題の解決を日本は探し求めた。父祖からの理想を失った後、日本は精神的な飢えを感じ、新たな真理を求めていた。戦後の日本で売れた書籍の60%が哲学や宗教をテーマにしたものであるという事実がこのことをあらわしている。解決を求めて西側に向いていたことで、西側の多くの者たちにとって、日本がいますぐにでもキリスト教に転向しそうな気配を示しているようにも見えたのだ。しかし、西側諸国は快樂な消費社会のシンボルである物質主義とその生産物を与えたにすぎなかった。国を愛し先祖を愛し天皇を愛することに基づいた精神主義から、日本は、物や科学技術の進歩にたよる宗教、お金、快樂、楽しみといったことに転換していった。このような価値観の変質が、今日日本で起こっている多




くの出来事を説明している。このような日本特有な現象は、これから自力で発展しようと計画している新興国にとっても大きな参考となっている。物質的な観点だけで見ると、日本は確かに世界の中でも特異なモデルである。しかし日本はこのようなゴールに達するために、大きな代価を払ったのだ。」

このような、彼のメッセージに応え、また日本の状況のなかで何かをなしたいとの思いを抱いて、来日した宣教師が正確に何人になるのかは分からないが、多くの管区から日本にやってきた。当然のことながら国籍は多数になり、まさに「国際管区」「多国籍管区」の様相を呈するようになった。日本においてイエズス会が携わる使徒職も、大学、短大、専門学校、中学高等学校、小教区、黙想の家、社会的施設など多岐にわたった。

そこで問題となったのは、多国籍ゆえのコミュニケーションのあり方である。共通語は日本語であるが、日本語を使うことには会員によって差があった。文化や思考様式の違いもあった。もともと、ドイツ西管区の宣教地区として始まったために、ドイツ人宣教師が主流派であった。そこへスペイン人、アメリカ人が次第に増えていった。イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、アイルランド、ハンガリーといったヨーロッパの国々だけでなく、キューバ、メキシコ、アルゼンチン、ペルー、コロンビアなど、南アメリカの国々からも宣教師はやってきた。それだけでも民族の違い、文化の違い、思考様式や生活様式の違いは容易に察することができる。そこに日本人が加わるのである。これをひとつにまとめあげるのは至難のわざであっただろうということも察することができる。

このような状況下で、今後のことも見据えてイエズス会の使徒職をどのように方向づけるかを決断しなければならなかったとき、さまざまな議論があり、アルベ神父の考え方に反対する声も多くあった。オランダ人のある宣教師からこんな話を聞いたことがある。





問題は広島教区における教会司牧のあり方であった。広島教区は、広島、岡山、鳥取、島根、山口の中国5県を管轄統治している。その小教区の教会の多くはイエズス会が設立したものであった。1921年に大阪教区を分割してその西の部分を広島代牧区とする教皇庁の決定を受け、ドイツ西管区が管轄することになったからである。戦後になって次第に教区司祭の数が増えていくようになると、5県全体をどのように司牧するかという問題が起こってきた。5県全体をイエズス会員と教区司祭が共同で司牧していく方法、5県を地区割にしてイエズス会と教区司祭および他の修道会と分離して司牧していく方法などが考えられたが、アルペ神父は、地区割にする方法を採用した。具体的には、広島県を教区司祭が、山口県・島根県をイエズス会が、岡山県・鳥取県をスクート会が担当するという形である。この方法に異を唱える会員は多かった。これでは広島教区をひとつにまとめることはできず、三つの地区がばらばらになってしまうと考えたからである。激しい議論の末、結局はアルペ神父の考えどおりになったが、この形を最後まで反対した会員がいた。私はその神父からこの話を聞いたのだが、「アルペは間違っていた」と激した表情を少し浮かべて話をするのが印象的であった。

こうしたことは、ある使徒的施設をつくるときにはよくあることであった。激論が交わされたであろうことは想像に難くない。しかも多国籍である。「私の思いとは違う！」と苦い思いをした会員は多かったであろう。「総長としてのアルペはすばらしい。でも、管区長の時は・・・」と話す会員は今でもいる。

もうひとつの課題は財政的な基盤である。これも先輩の神父から聞いた話である。ローマでの留学を命ぜられたものの、滞在費も生活費も自分で賄わなければならなかった。そこでイタリアに到着するや、どこかの教会に住み込み、ミサをする手伝いをし、信者が申し出たミサの意向を受け取って、その献金で何とかしのいだものらしい。イタリア語がまだ十分にできなかつたときからそうせざるを得なかつたのだとか。「日本



管区に金はなかったからな」と苦勞話をしてくれた。


日本管区に金がないという事実を、もうひとりの神父は語ってくれた。上智大学に理工学部をつくるというので、この神父は化学の勉強をするように命じられた。東京大学で博士課程の勉強を始めたのだが、指導教授がアメリカに行くことになった。「君もいっしょに行って、私のもとで研究を続けないか」と誘われた。そこでアルペ神父にこの話をすると即座に、「それは無理です」と言われた。理由は、「日本管区にはお金がないから」だったという。幸い、指導教授がアメリカの大学にかけあってくれ、奨学金を得ることができたので、アメリカ留学はできた。教授がわざわざアルペ神父に会いに来て、説得もしてくれたらしい。

こうした事情をなんとかするために、アルペ神父は外国に出向いて寄付を募ることも厭わなかった。ドイツはもともと日本の親管区であったから、ケルン教区をはじめ、熱心に寄付してくれた。ドイツの宣教師は何かある事業をはじめるとは、国に帰って寄付を募ることもした。そのようにしてできた施設や教会はたくさんある。カリフォルニア管区は広島に中学高校を設立するさいには、ある篤志家の寄付とともに多額の寄付をし、そればかりか会員までも惜しみなく派遣してくれた。スペインは日本のための寄付を集める事務所をつくり、多くの寄付を集めてくれた。メキシコも貧しくはあったが、乏しい中からも日本のために寄付してくれる人は多かった。そのようにして集めた寄付をもとに、いくつかの基金をつくり、それを運用していくこともアルペ神父は考え、その専門家を養成することも行った。施設を建てるための基金、会員の養成のための基金などを盤石のものにした。特に会員養成のための基金を充実し、勉強に専念できる管区にしていった。

1965年5月22日に、アルペ神父は総長に選出されるが、この年の管区カタログによると、会員数は441名。内訳は、司祭315名、神学生90名、プラザー36名である。宣教師の出身管区は38管区。出身国は18カ国になる。使徒職の施設としては、大学2、中高3、小教区26、







黙想の家 1。養成関係の家は、修練院、哲学院、神学院、日本語学校があった。会員が居住する共同体の数は 38。アルペ神父の精力的な活動の成果とってよい。

ただおもしろいことがひとつある。アルペ神父が管区長になってから、巡察使が日本に派遣された。巡察使というのは、総長の命を受けて、ある管区に派遣され、その管区の状況をつぶさに見て周り、ひとりひとりの会員に会って話しを聞き、管区の内情を総長に報告する任務が与えられた会員である。この時日本に派遣されたのはインドネシア管区のケステル神父であった。巡察使は自由に会員の意見を聞くことができた。巡察使が派遣されれば、会員は管区長を飛び越して自分意見を述べることができた。ケステル神父はどのような意見を聞いたのであろうか。そしてそれらを元に日本における宣教活動に対してどのような具体的提言を総長にしたのであろうか。気になるころではあるが、ケステル神父が 2 年間におよぶ巡察の後、役目を終えて総長に報告しようとした時、総長はアルペ神父に替わっていた。アルペ神父が管区長であった日本管区について、総長となったアルペ神父にどのような報告がなされたのか。アルペ神父が総長の執務室に初めて入って椅子に座ったとき、机の上にはその報告書が置かれていたという。

アルペ神父の管区長時代にできた使徒的施設として、長崎二十六聖人記念資料館のことに触れておかなければならない。これはアルペ神父にとってきわめてシンボリックな意味を持つものだからである。

長崎は、1580 年に領主の大村純忠からイエズス会に寄進された場所であった。フランシスコ・ザビエルが 1551 年に日本を去ったあと、コスメ・デトーレス神父は小さな漁村でしかなかった長崎に港をつくり、南蛮船が往来できるようにし、キリスト教宣教の拠点とした。大村純忠も受洗し、領民もキリシタンとなった場所だったのである。しかし、



1596年に豊臣秀吉は禁教令を出した。この時、禁教令に従わず、宣教活動を行ったフランシスコ会のペドロ・バプティスタ神父をはじめ、26人のキリシタンが京都で捕縛された。彼らは長崎まで歩かされ、1597年2月5日に西坂の小高い丘で十字架に磔にされた。1862年、教皇ピオ9世は、この26人を殉教者として列聖した。1863年に大浦天主堂で、約260年の間、禁教下にあっても信仰を守り続けたキリシタンの子孫が発見されて以来、日本の再宣教を願うカトリック教会は、日本最初の殉教者のどれほど厳しい迫害にも屈することのなかった信仰を称賛することによって、その宣教が発展することを望んだのである。

すでに触れたように、1908年にイエズス会は再渡来するが、長崎はイエズス会にとって魂の地だった。そこに宣教の拠点をもつことは悲願だったと言ってもよい。1958年、当時の長崎教区の山口愛次郎大司教は、長崎を訪れたアルベ管区長に二十六聖人の記念碑建立を勧めた。これを受けて日本管区は、西坂に資料館とレジデンスの建設を決めた。長崎市長であった田川務氏は、市が所有する土地であったが、これを借地としてイエズス会に提供した。記念碑となる二十六聖人のレリーフ像の作成は、船越保武氏に依頼し、記念館は、広島の平和記念聖堂の設計にも携わった今井兼次氏が設計した。1962年6月10日、日本二十六聖人列聖100周年を記念する日に完成、記念碑の除幕式が盛大に執り行われた。その時、アルベ神父は次のように述べた。

「この記念碑は石とブロンズでつくられているとは言え、ここからほとばしり出るものは、生き生きとした暖かい愛の精神であります。この碑は愛の証を教えるドキュメントであり、愛によって、力強く世界恒久平和を訴えるものであります。今日、世界のどこかで憎しみの戦い、冷たい戦争が続けられていますが、愛のシンボルの周りにお集り下さった皆様の熱誠は、日本と世界の人々をして、互いに手を取り合わせ、人類に二度と悲劇を繰り返させないでしょう。」



広島と長崎は原爆の被害を受けた地である。広島で被爆したアルペ神父にとって、長崎はイエズス会員としても魂の故郷であったといっても過言ではない。そして、二十六聖人が殉教した2月5日は、アルペ神父自身も生涯を閉じる日となるのである。



(二十六聖人記念のレリーフ)

### 第三章 総長として


1958年、教皇ピオ12世の逝去にともない、新たな教皇を選出するためのコンクラーベが開かれた。選ばれたのはヨハネス23世である。すでに76歳であった。ゆえに、この教皇に新たな何かを期待するという雰囲気はなかった。ところが、ヨハネス23世は、教皇に選出されるや、世界のカトリック教会に向けて最重要なメッセージを発表した。公会議を開催するというのである。そして、その公会議を「第二バチカン公会議」とするとのことであった。

この知らせに世界中が仰天した。実は、先の公会議は、1869年に開かれたものの、正式な終了が宣言されていなかった。当時のヨーロッパにおける紛争でごたごたしていたせいでもあるが、カトリック教会自身、近代化の流れを無視して、伝統の中で新たな時代の流れを飲み込んでしまおうとする姿勢が強かったからである。

第二バチカン公会議の開催という、誰も思いつかなかったことをヨハネス23世は発表した。一体何のための公会議なのか、そしてその公会議はどのようなものになるのか、予測がつかなかった。教皇はその点に関しては、明確に述べた。“aggiornament”がそのキーワードであった。つまり、今のカトリック教会を現代化すること、現代という時代に適応して刷新すること、古い伝統に凝り固まった教会を時代に合わせて脱皮させることを意味していた。

公会議は1963年に招集された。世界各地の司教、顧問神学者、そして東方教会の司教たち、プロテスタントの代表者も招かれた。ローマ・カトリック教会との関係を分断し、キリスト教分裂を経験したキリスト教であったが、信仰はひとつであることを確認しようとする意志の表れであった。これを見ても、この公会議が「画期的」なものになるであろうことを予想させた。

今ここで第二バチカン公会議について語ることはできない。それを目的としたものではないからである。ただ、この公会議がすべての修道会



に影響を与え、イエズス会も例外ではなく、そして、公会議の終了と時を同じくしてイエズス会総長に選ばれたアルペ神父にとって、イエズス会を刷新させるという重責を担うことになるという点において、この公会議の成果と影響については折に触れて語ろうと思う。

第二バチカン公会議は 1965 年に閉会となった。4 つの憲章、9 つの教令、3 つの宣言からなる公文書は膨大なものである。しかし、その後のカトリック教会を刷新し、現代世界に開かれて対話を可能にする重要なものばかりである。その中で、修道生活を刷新させるための「修道生活の刷新・適応に関する教令」は、どの修道会においても、その後の修道会のあり方を変えていくものになった。

## 31 総会

イエズス会は 1965 年 5 月 7 日に、第 31 総会を開催した。ヤンセンス総長の死去に伴い、次の総長を選ぶために招集されたものではあったが、総長選出の目的以外にも、第二バチカン公会議の成果を修道会にどのように取り入れ、刷新させていくかを考えなければならない総会とならざるを得なかった。

そのような時に総長に選出されたのが日本管区の管区長として総会に参加していたアルペ神父であった。アルペ神父はすでに述べたように、修練長や準管区長、管区長として、日本における宣教の重大な責任を背負ってきた神父であった。そして、これもすでに触れたように、世界各地を飛び回り、日本の惨状を訴え、原爆の悲惨さを証言し、それゆえにこそ、日本のカトリック教会に対する助けが必要であること、何よりも宣教師の派遣が急務であることを熱く語ったのであった。その声に応じて、世界各地から宣教志願を願う若きイエズス会員は総長に手紙を書き、日本行きを懇願した。総長もまたその声に応え、日本管区は日本人会員と 18 ヶ国からの宣教師からなる国際管区となっていた。

それゆえ、アルペ神父の名前はすでに世界に知られていた。日本に來




る前に、ベルギーやアメリカで勉学を積んだアルペ神父は多国語を話すこともできた。総会に出席する直前、管区長秘書だった神父は、彼にささやいたそうである。「アルペ神父様、ローマに行ってしまうと、あなたはもう日本に戻ることはないでしょうね。」

総会が開かれてすぐ、後継の総長選出選挙が行われた。何度かの投票の末、選ばれたのはアルペ神父であった。選ばれた翌日、総会の代議員に向けたあいさつで彼は次のように語った。

総長としての私の最初の話をするにあたって、私の唇に自然に出てきたのは預言者エレミアの言葉でした。「ああ、わが主なる神よ、私はどう語ればよいのか分かりません」(エレミア書1章6節)。これは、今ちょうど私が経験している私自身が取るに足りない者であるとの思いをよく表しています。しかし、神のみ旨がこれを果たすであろうという証です。これこそ私の唯一の慰めであり、それが私の霊を引き上げてくれるのです。「彼らを恐れてはならない。この私があなたとともにいる」(エレミア書1章8節)。あなた方を通して私を選んだ神は、私のか弱き手によってなされるこの大いなる職務を実行する恵みをも私に与えてくださいます。「私を離れては、あなたがたは何もできないからである」(ヨハネ福音書15章5節)という主の言葉、そして、「何者でもないのに、自分が何者かであると思う人がいるなら、その人は自らを欺いているのです」(ガラテア書6章3節)という使徒パウロの言葉を、これほど身近に感じたことはありません。さらに、この選びは神からのものであるがゆえに、私は、使徒パウロがへりくだって言う、「私を強めてくださる方のお陰で、私にはすべてが可能です」(フィリピ書4勝13節)と、言うことができます。また、主の言葉は私を強めてくださいます。「私の名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、彼に知らせよう」(使徒言行録9章16節)。







この言葉通り、総長としてのアルベ神父には、「私の名のために」、大いに苦しまなければならないことが降りかかっていった。

31 総会は総長選出の後、7月15日に一旦閉会した。第二バチカン公会議が要求するものの一つ一つに明確にすぐ答えが出せるわけではなかったからである。

総会のメンバーは1年後に再招集されることになり、1966年9月8日に第二会期が始まった。この総会について、詳細に語ることはここでは避ける。というのも、この総会の教令は第二バチカン公会議が示したカトリック教会改革のすべての点を取り上げ、イエズス会としての改革の方針を打ち出してはいるが、具体的に何をどうするかについてはそれほど触れていないからである。その意味では、1974年に開催された32総会について語るべきである。アルベ神父が招集し、今日のイエズス会を根本的に方向づける指針を打ち出し、彼の総長としてのリーダーシップを発揮することなしには成立することのなかった総会だからである。

## 32 総会

1974年、アルベ総長は31総会から10年が経過し、その間さまざまな動揺を経験したイエズス会がどのような刷新のプロセスを経て来たのかを検証し、さらにまた、現代においてイエズス会の本質的な使命が何であるかを再検討するために総会を開くことにした。

この総会は、総長の死去にともなって新しい総長を選出するために招集されたものではない。イエズス会の450年におよぶ歴史の中で、そのような総会はいまだ7回しか開かれていない。緊急を要する問題があり、どうしても解決しなければならないときに招集される特別な総会であった。

1974年12月2日に総会は始まった。そして、翌12月3日、聖フランシスコ・ザビエルの祝日に、当時の教皇パウロ6世は総会の会場に姿

を現し、代議員に向かって演説を行った。教皇自身この総会には大きな関心を抱いており、アルベ総長は準備のプロセスを常に教皇に連絡していたのである。

パウロ6世はイエズス会がどこから来て、今どこにあり、そしてどこに向かって行こうとしているのかを問い、創立者のカリスマとイエズス会の源泉に立ち返り、現代に適応しなければならないことを語った。特に、創立者ロヨラの聖イグナチオのカリスマに関しては、極めて深い理解とともに力強く語ったのが印象的であった。

しかし、教皇のこの総会に対する関心は総会そのものの行方に大きな影響力を与え、ときに混乱を招くことにもなった。12月16日、パウロ6世の直筆の書簡がアルベ総長に届けられた。そこには、イエズス会固有のカリスマである「第四誓願」について何の変更も加えてはならないことが記されていた。




(パウロ6世とアルベ神父)

## 第四誓願

「第四誓願」とは何か、イエズス会員でない人にとっては何のことか理解しがたい。しかし、イエズス会にとっては、そのアイデンティティの根幹に関わるものである。

「第四誓願」とは「清貧、締結、従順」の修道三誓願とは別に、イエズス会員がすべての養成を終えて正式にイエズス会に受け入れられるとき



に立てる四番目の誓願のことで、その内容は、「派遣に関して、教皇に対してまったく従順であること」である。これは、イエズス会創立当初、聖イグナチオが教皇とイエズス会員が特別な絆で結ばれることを望んだために立てられる誓願であった。

しかし、この誓願はイエズス会員の中でも「盛式誓願会員」になる者だけが立てる。イエズス会には「会員」と呼ばれても、階層がある。「第四誓願」を立てる者と修道三誓願だけを立てる司祭会員がいる。さらに、修道三誓願は立てるが司祭にならない会員がいる。通常「ブラザー」（修道士）と呼ばれる。また、「神学生」（修学修士）と呼ばれ、修道三誓願を立てるが、養成過程の途上にある会員、イエズス会に入会して修練を受けている会員もいる。広い意味では「会員」であるが、もっとも厳密な意味では「第四誓願」を立てた「盛式誓願会員」が「イエズス会員」である。ゆえに、この会員だけが総会に参加する資格を持ち、その準備段階の管区会議にも参加できる。また、管区長や修道院長もこの会員から選ばれる。

このような区別がなぜ生まれたのかは、歴史的な背景もあるのであろう。しかし、現代においては、とくに会員の間心の一致を考えた場合、このような階層（“gradus”「級位」と言われる）が妨げになることもある。そこで31総会は「盛式誓願会員」以外でも管区会議に参加し、総会にも参加できる道を開いていった。これはイエズス会刷新のひとつだったのである。

32総会は引き続き、この問題を取り上げ、「第四誓願」がすべての会員によって立てられる可能性を考えようとしたのであるが、教皇はこの動きを喜ばなかった。イエズス会固有のカリスマである「第四誓願」に変更を加えることは、イエズス会の真の刷新にはつながらないと逆に考えたからである。

## イエズス会員のアイデンティティ

こうした問題も起こったが、他にも取り上げるべき難題は数多くあった。31総会におけるイエズス会の刷新の方向性を疑い、第二バチカン公



会議以前の姿に戻るべきだと考える会員もいたし、もっと急進的な改革を要求する会員もいた。そのような状況のなかで、イエズス会員とは何者であり、現代における使命は何であるのかを新たに表現する必要性が高まってきた。そして、その表現を見いだしたならば、それにふさわしいイエズス会員の生活様式や行動様式、そして会員の養成のあり方も再検討されなければならない。

このような課題に 32 総会はチャレンジしていき、1975 年 3 月 7 日に閉会した。そして、その結果としてまとめられた「教令」は、イエズス会に新たな息吹を吹き込むものとなった。そのすべてを今ここで紹介する訳にはいかないが、そのなかで二つの教令について触れておきたい。この教令こそ、アルペ神父が総長として今日のイエズス会を導いていったきわめて大切なものなのである。


まずひとつは、「第二教令」で、現代においてイエズス会員とは何者か、そのアイデンティティを明らかにしたものである。

イエズス会員であるとは何を意味するのか。それは罪びとでありながら、イグナチオのようにイエスの伴侶として招かれているのを知ることである。イグナチオは、処女マリアに「自分を御子と共に置いてくださるようにこい求め」、また、御父自らが十字架を担うイエスに、この巡礼者をその伴侶にするように求めておられるのを見たのである。(11)

今日イエスの伴侶であるということは、どのようなことか。それは十字架の旗のもとに、現代の重大な戦い、つまり信仰と、信仰に含まれている正義のための戦いに従事することである。(12)

第 32 総会に参集したイエズス会員は、その創立の目的、すなわち、「神のより大いなる光栄と人びとへの奉仕」について考察しつつ、信仰を保持し、正義を支持するという点で本会が犯した過ちを認め、心を痛めつつ、





十字架につけられたキリストの前に立ち、「キリストのために何をしたか、何をしているか、何をしようとしているか」を自らに問い、現代イエズス会員が何者であるか、何をしているかを明らかにする焦点としてこの戦いに参加することを選択する。(13)

このように記して、創立者のカリスマの源泉に立ち返り、現代に適応するというイエズス会のあり様と会員の姿を明確にした。

ここで力強く宣言された「信仰と、信仰に含まれている正義のための戦いに従事する」ということが、第四教令で「今日におけるわたしたちの使命」が「信仰への奉仕と正義の推進」にあるという根本選択に繋がっていく。

## 第四教令

「第四教令」は、キリスト教信仰を宣教することと正義のための活動が別々に存在しているのではなく、キリスト教信仰の宣教には正義のための戦いが含まれていることを言っている。そして正義のための戦いは、社会正義のための活動を行っている会員だけに求められているのではなく、イエズス会のすべての活動や事業に携わっている会員に求められている。この正義のための戦いなしには、現代においてはいかなる宣教活動もイエズス会的なものではないのである。

ひと言で言うなら、今日におけるイエズス会の使命は、信仰への奉仕であり、正義の推進は、その奉仕が絶対的に要求することのひとつである。なぜなら、正義は人間が神と和解するために必要な人間同士の和解の一部をなすからである。(48)

この総会が世界のイエズス会に新たな息吹を吹き込んだと同時に、大きな混乱を招いたのも事実である。ある管区は、社会的なエリートを輩出するだけの学校には意味がなく、社会正義のために会員は従事すべき



として、学校を閉めてしまった。ある管区では、社会正義を推進させるためには、国そのものが改革されねばならないとし、会員が政府の大臣に就任するということがあった。カトリック教会法では、聖職者は政治に直接関与してはならず、政府の中に入ることは禁止されている。このような会員を退会させるべきか、アルペ神父は大いに悩んだ。このような問題は、イエズス会とバチカン教皇庁との間に緊張関係を生じさせる原因ともなった。

「第四教令」をめぐるさまざまな出来事の背景には、第二バチカン公会議の『現代世界憲章』とそれに続くカトリック教会の“preferential option for the poor”（「貧しい人びとを最優先する選択」）という福音宣教の方向性、そして1970年代に盛んになった「解放の神学」と深い関わりがある。

『現代世界憲章』は、教会が社会問題に関与することについて、教会の本来的な使命が宗教的なものであるとはいえ、人間のあるべき姿の実現のために、大いに貢献しようという姿勢を明確にしたものであった(42項参照)。そして、1971年の司教会議(シノドス)を受けて発表された『世界の正義』は、「人類の救いと、人びとをあらゆる抑圧された状況から解放するための教会の使命を果たすことが、正義を実現し、世界を改革することだと言える」と述べた。

これは、南アメリカを中心とする国々の司教が提起したように、現実社会の中で抑圧された状況にある人間の救いを「解放」という面から捉え、社会的構造悪や構造的な不正義と戦っていくことが、福音宣教を使命とする教会の「構成的要素」であると捉える動きを反映している。これが「解放の神学」といわれるもので、1970年代に大いに盛んになり、社会正義の問題と取り組むことはきわめて緊急性を帯びた教会の課題であることを訴えるものであった。

しかし、この「解放の神学」を推し進め、具体的な実践を行おうとするとき、ともすれば、経済的、政治的、社会的な活動に限定される印象



を与えることもあった。そこでパウロ6世は、『福音宣教』（1975年）“Evangelii Nuntiandi”という使徒的勧告のなかで次のように語った。「福音宣教が主張し、かつ実行しようと努めていることは人間解放については次のことが言われるべきです。それは、単に、経済的、政治的、社会的、また文化的な生活の領域に限定して考えるべきではありません。真の人間解放は、全人格を直視し、人間が志向する絶対者、すなわち神への関係も含むべきものであります。」「教会が人間解放を説き、そのために働き、苦しむ人々に接するとき、教会はその使命を宗教的な分野にのみ制限し、人々の現世的問題を顧みないというのではありません。でも、教会は、その霊的な使命が優先的であることを確認し、神の国の宣言を単なる人間解放に置き換えることはできません」と語った（33項、34項参照）。

神の国を宣教するうえで、宗教的次元と世俗的次元とをどのように統合していくか、その問題は引き続き議論されていくのだが、人間の救いを単に宗教的、霊的次元のこととして捉えるのではなく、むしろ、世俗的次元のことが「構成的要素」“constitutive”と位置づけるようになったことは特筆すべきことである。

## “Men for Others”



Only by being a man or woman for  
others does one become fully  
human.

— Pedro Arrupe —






このような「社会正義」と関わることの大切さと、関連して、アルペ総長が語った言葉のなかでイエズス会の教育に大いに影響を及ぼしたものがあつた。それが“Men for Others”（他者のための人）である。1973年にスペインのバレンシアでヨーロッパのイエズス会学校卒業生の大会が開催された。その基調講演でアルペ総長は、素朴な問いを参加者に投げかけた。「私たちイエズス会員は、あなたがたを正義のために教育してきたのでしょうか」と。この問いは、まさにカトリック教会が掲げた福音宣教において社会正義を実現しようとする実践的な行動との関わりの中で生まれたものであつた。続けて、アルペ総長は言った。「あなたがたも私も知っています。あなたがたの先生であつたイエズス会員の多くがこの質問にどう答えるかを。彼らは、「私たちはそうしてこなかつた」と答えるでしょう。」そのように言って、これからのイエズス会教育は、カトリック教会が表明した社会正義と福音宣教との関わり、教会が求める人間像としての「他者のために生きる人間」、そのような人間となるために必要な「回心」について語つたのである。この講演中、その内容に反応し、これ以上聞いていられないと腹を立て、会場から慚然として立ち去つた者もいたという話ともれ伝わっている。知的エリートを育て、社会的に高いステータスを得るような教育をするのがイエズス会の学校であると思われていた時代の卒業生に、アルペ総長の話が居心地の悪さを感じさせたのかもしれない。しかし、この“Men for Others”は、その後、全世界のイエズス会学校に共通するモットーとなつていった。とくに「他者」を単なる隣人ではなく、「もっとも小さな隣人」、つまり貧困のうちに生活せざるを得ない人、政治権力によって虐げられている人、社会の片隅に追いやられた人、戦争や紛争によって難民となつている人、社会的弱者を意味しており、そのような「他者」のための奉仕を意識した教育がイエズス会の学校では行われるようになった。

この教育の根本的な方針を具体的に示したものが、アルペ総長自らが立ち上げた「イエズス会難民サービス」“Jesuit Refuge Service”（JRS）





である。1970年代の後半から世界的に増加した難民、とくにアフリカやアジアにおける難民の問題に取り組むための組織をつくりあげたのである。日本でもカンボジア難民のキャンプ地にイエズス会学校の学生や卒業生が派遣されたし、募金活動も盛んに行われた。当時神学生だった私は、上智大学長であったピタウ神父とともに新宿駅東口に立って募金活動をしたものである。仲間の神学生はタイの難民キャンプにボランティアとして派遣された。

このような背景のなかで生まれた32総会の大方針が、遅々として進まない管区もあったし、会員同士の間にも緊張関係を生むこともあった。古き良き姿を引きずる会員もいれば、新たな動きにいち早く飛び込もうとする会員もいた。養成のあり方も昔風の修道院的な雰囲気はいつの間にかなくなっていった。そうしたイエズス会内の雰囲気を漂わせるひとつのエピソードを紹介したい。それは日本管区の神学院でのことである。

私が学んだ頃の神学院は練馬区の上石神井にあった。その隣には教区の大神学校もあり、イエズス会の神学生も教区の神学生も上石神井で勉強した。教授陣も同じ場所に住んでいた。教授陣の中にドイツからの宣教師で旧約聖書を長く教えた神父がいた。授業は厳しく、しかしその内容はかなり高度なものだった。この神父は昔ながらのスータンをいつも着用し、朝食には必ず黒パンを食べた。一日の過ごし方も決まった時に決まったことをする人で、若い神学生と口を利くこともほとんどなかった。ミサは毎日小聖堂で一人で立てた。共同ミサに参加することもなかった。その神父を神学生の共同体が一度招き、一緒にミサをしてくださいとお願いしたことがあった。予想に反して快く引き受けてくれたのには皆驚いた。そしてそのミサの中でこの神父の語った説教が印象的であった。



「皆さんは私の生活ぶりを見て、不思議に思っているかも知れない。私はイエズス会が大好きでイエズス会に入りました。あなたがたもそうでしょう。でも私が入ったイエズス会を私は愛しているのです。私は皆さんが入ったイエズス会を否定はしません。ですから、私が入ったときのイエズス会も否定しないでください。」

新旧のイエズス会が交錯する象徴的な説教であった。

## イエズス会の源泉


しかし同時に、イエズス会の源泉に立ち戻り、現代的に刷新していくための創立者に関わる研究が飛躍的に発展したことも忘れてはならない。聖イグナチオや靈操の研究が、古典的な解釈やそれに基づく文献だけに頼ることなく、まさに源泉を深く追究していくことが飛躍的に進んでいったのである。

たとえば、聖イグナチオの伝記は、彼の姿を若い時から眺めて育ったリバデネイラ神父のものが公式のもので、それ以外にはなかったが、聖イグナチオ自身が自分の半生を語って聞き取らせたいいわゆる「自叙伝」が発見され、それは綿密に校訂され、世界各国で翻訳され、聖イグナチオの生の姿を垣間見ることができるようになった。

また、『靈操』もラテン語で書かれたものが「ブルガタ訳」として公式のものとしてされていたが、スペイン語の自筆の原稿が見つかり、これもまた綿密な校訂作業を経て、各国語に翻訳された。この自筆原稿は、公式のラテン語訳で解釈されたものとはまったくニュアンスの異なる聖イグナチオの独特の言い回しや表現が織り込まれており、従来の解釈とは違った側面を照らした契機となった。

その他、創立期のイエズス会のあり方が研究され、イエズス会の靈性を深く掘り下げた研究も相次いで公にされるようになった。そうした研究が創立者のカリスマに戻り、現代世界に適応して、今日にふさわしいイエズス会のあり様を実現していくための大きな力となったことは言うまでもない。





このような刷新を支え、勇気づけ、自ら発信したのもアルペ神父であった。彼は多くの書簡を会員に宛てて書き、イエズス会の霊性研究会が開かれるたびに、自ら講演し、聖イグナチオと創立期のイエズス会の姿を明確に示し、現代のイエズス会員がいかにあるべきかを精力的に語った。イエズス会のローマ本部には「聖イグナチオ霊性研究センター」(CIS)が設けられ、毎年研究テーマを定めて研修できるコースが実施されたが、そこでアルペ神父は講演し、その内容を小冊子にして全会員に発信したのである。それはかなりの数に及ぶのであるが、ここでは二つだけ取り上げて、アルペ神父はどのように霊操を理解し、イエズス会のあり様を示したのかを見ていきたい。

## 愛に根ざし、愛に基を置いて “Rooted and Grounded in Love” (1981年)

アルペ神父にとって霊操とは「愛のペダゴギー」である。つまり、霊操を行う者が神の愛に目覚め、神の愛に生きるようになることを段階的に学ぶ方法ということである。

霊操の最初から最後までを貫いているのは「愛のダイナミズム」である。「愛徳」(caritas)は心の状態を指すが、「愛」(amor)は心の動きを示す。具体的に見てみよう。

霊操の最初にある「総注」(annotationes)には、霊操を受けるものと授ける者に対する諸注意が記されている。「霊操」とは、体操のように心を鍛錬することである。そして、霊操指導者は霊操者に対して、黙想や観想する内容を簡潔に要点のみを示し、霊操者は知性と意志を存分に発揮して行う。霊操指導者にとって大切なことは、霊操者の心に動きがあるかどうかを知ることである。もし何の動きもなければ、どのように霊操しているかを問いたださなければならない。何より注意しなければならないのは、霊操者の心に何らかの動きがあったとき、それは神に由来するものなのか、神に反するもの(悪魔、悪霊、敵といった表現が使われている)に由来するものなのかを識別できるように手助けすること



である。この霊動きと識別については、霊操にある「識別に関する規程」を参照する。

この「総注」のポイントは、霊操者の心の動きが神に向かうことであり、神が直接霊操者の心に触れることを指摘しているところにある。

この霊操の間、霊魂がみ旨を求め、創造主おん自らがご自分のものである経験な霊魂に瀬しい、神への愛と賛美の火で燃やし、今後神への奉仕がよりよくできるように霊魂を導かれるのはさらにふさわしく、より良いことであろう。


### 【霊操 15】

このような「総注」を記して、霊操は「原理と基礎」を提示し、第一週から第四週に至る道を示す。それを通して霊操者の心の動きは「愛のダイナミズム」のなかに入っていくのである。

「第一週」のテーマは「罪」である。神に背く天使の罪、人祖アダムとエバの罪に始まる罪の歴史を黙想し、自分自身の罪の歴史を振り返る。ただ振り返るだけではない。罪を知ることによって、悔やみ、涙し、ゆるしを願い、ゆるされた恵みを感謝する。そこには「神への愛に燃える」といったことは直接には出てこない。しかし、この週で体験する霊操者の「慰め」と「荒み」が何であるかを知るとき、「神への愛に燃える」という最初のステップであることが理解できる。

第一週にふさわしい「霊の識別の規定」のなかで、「慰め」とは、「霊魂のうちに内的霊動が駆り立てられて、その結果、霊魂に創造主への愛が燃え上がって来て、神との関係なしに地上のいかなる被造物も愛することができ」ない状態であり、神への「信仰・希望・愛」が成長し、内的な喜び、つまり「霊魂の平和と安らぎ」を得ることである【316 参照】。霊操の第一週を体験する霊操者に期待されるのは、「罪」をテーマにした黙想でありながら、霊的な慰めを知ることなのである。





続いて、第二週では、イエス・キリストの生涯を観想する。その準備として、この観想によって望んでいること願ひ、イエスをよりよく愛し従えるように、「主を深く知る」ことを願う。この準備はイエスの生涯のすべての場面を観想するときの準備の祈りとなる。そして、これらの観想をとおして、イエスのために何をすべきかを考察していく。また、具体的な生き方としてどのような生き方を選ぶべきかを深く考えていく。『霊操』は次のように言っている。

**私の心を動かし、このことを選定させる愛は、上から、すなわち、神の愛から下るものでなければならない。従って、選定する人は、選定しようとするものに対して多かれ少なかれ自分がもっている愛着が、創造主への愛からのみ来ていることをまず自分の中で痛感しなければならない。【184】**

イエスの生涯を観想することによって、イエスをもっと愛するようになり、その愛が動機となって、自分自身のあり方を選びとるようになることが肝要なのである。

さらに、第三週と第四週では、イエス・キリストの受難、死、復活がテーマになるが、霊操者は、イエスの苦しみと受難が自分のためであったことを思い、その苦しみをともにするように、また、復活にあつては、死の苦しみを経て獲得された無常の喜びにあずかることができるように祈る。

最後に、「愛にいたるための観想」では、神への愛と恵みに満たされた霊操者が、この愛にどのように答えるべきかを祈り、「自己を捧げる祈り」で締めくくる。

**主よ、すべてを取って受け入れてください。私のすべての自由も、記憶も、知性も、意志も。私にあるものと持っているもののすべてを。あなたがこれらを私に与えてくださったのですから、主よ、あなたにお返**



しいたします。すべてはあなたのものですから。どうぞ、み旨のままにお取り計らいください。ただ主の愛と恵みを与えてください。それだけで私は十分なのです。【234】

このように、霊操は「愛のペダゴギー」として、霊操者を第一週から第四週、さらに「愛にいたるための観想」を段階的に体験させることによって、神への愛に燃え上がらせていくのである。

## 私たちの行動様式 “Our Way of Proceeding” (1979年)


アルペ神父が総長時代に全イエズス会員に宛てた書簡の数は膨大である。とくに、32 総会以降は頻繁に書かれた。言うまでもなく、大きな変革が必要とされた時である。イエズス会とイエズス会員のあるべき姿を語らねばならなかったのである。

私が上石神井神学院で過ごした7年の間に、神学生の共同体では何度も何度もアルペ総長の書簡を読み、分かち合うことが行われた。そのなかで、私に一番大きな影響を与えたのは「私たちの行動様式」という書簡であった。

横道にそれるが、この書簡を日本語に訳したのは中井<sup>まこと</sup> 允 神父である。彼から聞いた話であるが、原題の “Our Way of Proceeding” を何と訳すか大いに悩んだという。“proceeding” は基本的には「物事の進め方」という意味である。直訳したのではピンとこないし、言葉としても聞が悪い。考えに考えた末、「行動様式」という訳語にいたったということである。彼もアルペ修練長のもとで修練を行っている。中井神父は『イエズス会会憲』や『32 総会教令』をはじめ、多くの大切な文書を日本語訳にしたが、アルペ総長の書簡の多くも彼の翻訳である。“disponibility” とか “inculturation” とか、耳慣れない新しい言葉に悪戦苦闘したのであったが、アルペ神父の心を知るひとりであったといってもいいであろう。







「私たちの行動様式」に話を戻す。イエズス会会憲の草稿ができあがったとき、それを手にしてヨーロッパ中の共同体を訪問し、イエズス会という修道会のあり方や会員の生活の規定について説明したのが、ジェロニモ・ナダル神父である。彼は説明の最後にこう言った。「師父イグナチオは決して理念を語りはしなかった。いつも私たちの行動様式について語ったのである。」

確かに『会憲』には“modus procedendi”という言葉が何度も登場する。読めば分かるが、『会憲』は最初から最後まで、物事の進め方が記されている。誰を入会させるか、誰を入会前の面接者にするか、何を質問するか、誰を退会させるべきか、その手続きはどうするか。修練の内容、勉学期の注意事項、会員を派遣するとき心がけるべきこと、会員の生活のあり方、会議の開き方、果ては、臨終を迎える会員の看取り方まで示されている。

『会憲』のみならず、『靈操』も学校運営の方法を記した『学事規程』も、すべて「方法」を明確にしている。それがイエズス会の特徴なのである。

アルペ総長は、現代のイエズス会のあり方を模索し、具体的な姿を示そうとすることにあたって、「行動様式」という言葉を使ったのは当然のことであった。

第32総会は、全世界のイエズス会から寄せられた要求にこたえ、「今日に生きるイエズス会員」の教令の中で、総会の権威をもって、現代イエズス会員のアイデンティティを叙述し、現代にあってイエズス会員であるとは何を意味するか明らかにしております。しかし、このような叙述を前にして、いま、私たちは、一人ひとりのイエズス会員と、また修道会としてのイエズス会の特徴や態度に変化があったかのかどうかを私たち自身に尋ねてみなければならないのです。

さらにはっきり言うなら、それは、イエズス会の中に生活する者として、公会議が示した二つの指針、すなわち、源泉にもどることと現代への適応ということの間にある緊張関係を、具体的にどのように解決すべきか



という問題であります。


この質問は、イグナチオ的な用語を用いれば、次のようになるでしょう。「イエズス会の行動様式」は、どのように変わってきたか、どのように変わるべきであったか、また、将来どのように変わってゆくべきか。

このように述べて、アルペ神父は、聖イグナチオが書簡を通してさまざまな地域に派遣した会員に対して与えた具体的な指針や振る舞い方、会憲や霊操において使用された「行動様式」という言葉の使い方などに言及している。そして、会憲の中で示されたとおりの有能な秘書であり、「聖イグナチオの手」とも言われたジェロニモ・ナダル神父がどれほど「行動様式」という言葉でイエズス会を特徴づけたかを指摘しながら、現代のイエズス会員の行動様式について語った。

アルペ神父は、イエズス会の創立期とはまったく異なった現代においてどのような行動様式が現代のイエズス会の特徴を示すのかという問いに対して、“per modum negationis”（～ではないという言い方で何であるかを示す方法）で語る。というのも、現代社会の大きな変化に対応して、イエズス会員の働き方や生活の場も含めた生活の仕方が大きく変わり、しかも国と文化の違いによって、統一的で均一的な行動様式を示すことが困難な時代になったからである。それゆえ、イエズス会員の行動様式は「～ではない」と記述することで、何であるかが見えてくるというのである。アルペ神父は言う。以下、長くなるが、そのまま引用してみる。

第一のタイプは、「フルタイム・プロテスター」、すなわち専従の抗議者です。疑いもなく、悪を糾弾することは予言者的・福音的な義務でもあります。しかし、抗議が真に福音的なものであり、建設的なものであるためには、どのように、いつ、何について、だれについて、そして、どのような観点から、また、どのような原則から糾弾するのかわっていなければならないことも同様に本当です。私たちが行う糾弾が、非常





に主観的になることも十分あり得るのです。調整が必要であり、公になされる抗議よりもむしろ私たちの側からの従属を必要とする企画を、毒を持った鋭いことばによって壊しているかもしれないのです。だらしない服装、無精ひげをのぼし、髪の毛はバサバサで、粗野な態度や話し方など、この十年間によく見られた抗議者のような姿をし、行動する人たちの場合、上に述べたような抗議者ではないかと疑う理由があるのではないのでしょうか。このような外面的な姿は、彼がしようとしていること、あるいはその内面的な動機の価値を減らすものですし、確かにイエズス会は、このような姿がそのイメージに付加されることを望んでいません。また確信が持つ誠実さ、真の清貧あるいは生活の厳しさなどは、そのような形で表されるべきではなく、また表わされても、人を納得させるものではありません。

第二のタイプは、職業一辺倒ともいえる人です。職業が使徒的な価値を持っていることは疑い得ません。職業一辺倒の人は、自分がたずさわっている職業の世俗的な側面に全く沈み込んでしまっている人です。職業のために、全く独立した生活、共同体から離れた生活、長上への依存から離れた生活を許してはならないのです。そのような職業が、十分に識別したうえで、イエズス会から与えられた派遣によるのではなく、自らの意志によるものであれば、彼は極めて危険な状況に置かれているといわざるを得ません。極端な職業化は、霊的な生活とあらゆる使徒的な働きを窒息させてしまう世俗化へと導く可能性があります。そのうえ、経済的に自らのことをすべてまかなうことができる状態、自由に旅行することなどは、私たちの行動様式と全く合致しているとはいえないような形で利用されることもあります。もしそういう状態に自分がいることに気がつくならば、その会員はイエズス会員のイメージに合致しない生活をしているということに気がつかなければなりません。

第三のタイプは、頼りにならないイエズス会員です。彼は秩序とか約束を守ること、金の価値、リクリエーションの限度を守ることなどに価値を置いていません。たびたびこのような人物は、勉強であっても、他




の活動であっても、彼がしている仕事の成果を調べられることに対して、極端なアレルギーを持っています。たとえ修道者であっても、このような人物が若い女性と無責任に自由な接触を持つとき、それは危険なことともなります。このような人物が示すイエズス会イメージは、控えめな言い方をしても悪いイメージだといわなければなりません。

第四のタイプは政治的な活動家です。このタイプは、社会的な使徒活動している人とは全く異なるのです。彼らは貧しい人びと、抑圧された人びとのなかに身を置き、不正な構造をなくそうとするまじめな望みを持っているかもしれません。しかし、その正義のための戦いが、キリスト教的な批判、援助あるいは分かち合いの正当な分野でなされず、あるときには、司祭的な「派遣」を全く放棄してしまうような政治的、それも政党活動の分野に入る時、その政治活動あるいは組合活動は福音的なものであることが難しくなり、イエズス会から派遣されて生き、活動するものとはいい難くなります。さらに悪いことには、その思想的な動機が、キリストが全く入る余地のないような人間観、社会観、歴史観に基づいているときです。このような活動家と、そしてこのようなイメージは、正統的なイエズス会のメンバーのものではありません。

最後のタイプは、狂信的な伝統主義です。このようなイエズス会員は、彼が持つマンネリズム、過度の固さを持った生活のスケジュール、個人生活、典礼生活、あるいは霊的生活における形式主義など、過去のものとなったシンボルや実践をもとにして自分の生活を築き上げています。彼は、福音の不可謬の解釈者として、また生ける者、死せる者の裁き手として、ことばや書き物をとおし、個人や修道会に対する感情的な批判をするなど、あたかも予言者のように振る舞い、鼻もちならぬ態度を取ることがあります。あるいは逆に、氣力を失った敗北主義、つまり苦々しい心で過去に生きているような状態に陥ることもあるのです。

このような会員の特徴は、好奇心いっぱいでも悲観的なニュースを求めること、とげのあることばで若い世代を批判し、若い人が持っている価値観を受け入れることができず、現実と想像を混ぜて、これら若い人が






持っている弱点について苦情ばかりを言うことです。彼は、自分の預金口座を作るなどのことはしないでしょう。しかし、多分に起こりうることです。同じ考えを持っている人びとや、親切な家族から手厚い世話を受けているのです。彼は、空になった私たちの教会についてまた、以前には彼のところへ霊的指導を受けにきていたのに今はこなくなった人びとの移り気によって心に痛みを感じます。しかし、これらのことがらの原因の一部は、彼の霊的な偏狭さと、継続的な養成の不足にあるのではないかと問うことはしません。

彼は「私たちの行動様式」のなかに移り変わってゆくものを永遠的な価値を持つものと考えており、もし彼が真にイグナチオ的な人物であるなら、私たちの会の創立者が持つ永遠的なそしてダイナミックな価値を追求するはずだということには気づきません。心のなかでは（心のなかだけかどうかはわかりませんが）彼は第31、第32総会、あるいは第二バチカン公会議さえも受け入れていないのです。イエズス会の総会や公会議を受け入れないことが、弱さや熱心のあまりに他の人が犯している外面的な失敗よりも相当重大なものであることに気がつきません。

アルペ神父はこうしたモデルが荒っぽいスケッチにすぎないと言いな  
がらも、それぞれのモデルが他のモデルを補完しているとも指摘し、これらのモデルを示す人に善意があることも認めつつ、イエズス会の行動様式を反映したものではないと明言している。

では、現代のイエズス会の行動様式を特徴づけるものはどのようなものなのか。アルペ神父は12の項目を挙げている。

- ①キリストへの愛
- ②応需性
- ③無償で与える感覚
- ④普遍性
- ⑤一致の意識

- 
- ⑥人間的なものへの感受性
  - ⑦厳密さと質
  - ⑧教会に対する愛
  - ⑨「ささやかな修道会」としての意識
  - ⑩識別の感覚
  - ⑪貞潔に関する繊細な心づかい
  - ⑫イエズス会的な感覚

ここに挙げられたことをひとつひとつ説明することはしないが、ひと  
言で要約するなら、それは「イエズス会的な感覚」“Sensus Societatis”  
という言葉に凝縮される。これもナダル神父が常に語った言葉であるが、  
「イエズス会のセンス」であり、イエズス会員としての一種の「第六感」  
というべきものである。このセンスこそ霊操を通して、イエス・キリス  
トと一致するという深い体験のうちに身につけるべきであり、ここから  
イエズス会の行動様式は形づくられるのである。





## 第四章 “tantas cosas . . .”

---

### 33 総会

1981年8月7日、フィリピン訪問を終えてローマのフィウミチーノ空港に到着した時、アルペ神父の顔は青ざめ、大量の汗をかき、手荷物を持つことさえできなくなっていた。急遽病院に搬送された。脳血栓を引き起こしていたのである。一命は取り止めたものの言語や身体に障害が生じ、職務を続行することは不可能な状態になった。アルペ神父は常々、身体機能の衰えを理由に総長職を辞したい旨、側近に伝え、教皇にも申し出ていたが、その願いは受理されなかった。もともとイエズス会総長は終身制だったからである。突然の病で職務続行が不可能となった場合、会憲に定められているとおり、総長代理が決められ総長職を続行することになっている。イエズス会はそのとおり行おうとしたが、驚いたことに、ここで唐突に教皇が介入してきた。ヨハネ・パウロ2世が、総長代理に変えて、教皇特使をイエズス会に派遣すると言ってきたのである。

このニュースに全世界のイエズス会が驚き、訝り、さまざまな憶測を生む事態となった。17名のドイツ管区の会員は連名でイエズス会統治に対する教皇の介入に対して手紙を教皇に送った。連名者の中には、第二バチカン公会議でもっとも影響力のあった神学者で20世紀最大のカトリック神学者のひとりとも言われるカール・ラーナー神父の名前もあった。その内容は、イエズス会の長上である教皇の決定をイエズス会員として痛みを感じつつも、従順の態度で受け止めるが、しかしそこには「神の指」を見つけることができないというものであった。「神の指」とは、聖イグナチオがイエズス会のあり方を基本的に描いた“Quinque Capitura”（直訳すれば「五つの章」と言われるもので、イエズス会基本綱要“Formura Insituti”の元となる）を教皇パウロ3世に差し出し




たとき、教皇がそれを指差して、“Digitus Dei est hic”（神の指がここにある）と言ったときの表現である。神のみ旨、神の意志がここにはあるという宣言だったのである。



（ヨハネ・パウロ 2 世とアルペ神父）

実は、このイエズス会統治に対する教皇の介入という事件の背景には、アルペ神父が主導するイエズス会の刷新に対して反対する勢力の動きがあった。31 総会および 32 総会は、第二バチカン公会議を受けて、イエズス会の源泉に立ち返り現代に適応するという大方針のもとに、いわばイエズス会の大改革を敢行しようとした。とくに 32 総会は、第二教令と第四教令に見られるように、社会正義の促進と信仰の宣布とが切り離されないものであることを強調した。これを実践することで、ある地域では多くのイエズス会員が弾圧され、殺害されることもあった。社会的富裕層はある意味で保守的であり、貧困層は革新的であった。“preferential option for the poor”（貧しい者を最優先する選択）という第二バチカン公会議後のカトリック教会の姿勢は、現実の政治権力や経済的体制に対する反抗でもあり、南アメリカやアフリカにおいては民衆が生きるか死ぬかという現実さらされてきたがゆえに、カトリック



教会の姿勢に大いなる希望を抱かせるものであった。イエズス会はある意味でその急先鋒に立ったのであって、犠牲者をとまなうのも当然のことであった。

これに対して保守的な会員にとっては、これが本当のイエズス会なのか、伝統的なイエズス会の形を根本から変えてしまうのではないかという危惧を覚えた。このような危機感をもった会員は具体的な行動にも出た。保守派の高位聖職者をとおしてアルペ神父の統治や指導が危険なものであることを教皇に伝え、自分たちには真のイエズス会の刷新のために「跣足イエズス会」をつくる用意があることを表明したのである。こうした情報を受けて、ヨハネ・パウロ2世はイエズス会に対して疑心暗鬼になるのも無理はない。どちらが正しいのか。アルペ神父は信頼するに値するのか。前任者のパウロ6世はイエズス会のことをよく知っていた。しかし、ヨハネ・パウロ2世はそうではなかった。そこで、アルペ神父が病に倒れたという知らせを受け、自らの特使をイエズス会に派遣することを決めたのである。教皇特使として総会議を開き、次の総長を決めるまでの役割を担わされたのは幸いにも、他の修道会からではなく、イエズス会員のパオロ・デツア神父であった。そしてさらに、デツア神父が高齢であり目も不自由であることから特使代理も派遣された。それが当時の日本管区長であったジュセッペ・ピタウ神父である。

ピタウ神父はデツア神父の代理として精力的に全世界のイエズス会共同体を訪問し、33 総会の開催に向けて準備した。聞いた話であるが、アメリカを訪問したときは、会員から歓迎の意を示さない冷たい視線が向けられたという。アルペ神父の総長代理として本来の通常統治からすれば、総長顧問の筆頭であったビンセント・オキーフ神父が行うはずの役割であった。彼はニューヨーク管区出身である。ゆえにアメリカ会員のピタウ神父に対する思いは複雑であった。それにもかかわらず、ピタウ神父は持ち前の明るさと明確な言葉をとおして状況を説明し、総会開催の理解を求めた。



## 総長辞任

1983年9月1日、33総会は開催され、ペーター・ハンス・コルベンバツハ神父が選出された。彼はオランダ出身であるがレバノンのベイルートで活動する宣教師であり、この時は、教皇庁立東方学院の学院長であった。

総長選出の選挙が行われる前に、アルベ神父の辞任の申し出が検討され、全会一致でこれを承認した。その時、アルベ神父の辞任の手紙が朗読された。全世界のイエズス会員に宛てたもので、イエズス会の各世代に対して、心温まるメッセージを送ったのであった。全文を引用する。


私は、どんなにかもっと良い健康状態で皆様とともに、この会議に参加できたらと思います。御覧のように、皆様に直接語ることさえできません。しかし、私が皆様に申し上げたいことは、総長補佐がわかってくれました。

私には以前にもまして今、自分自身が神の御手の中にあることがわかります。これは私が生涯、若い時から望んで来たものです。ただ、今違ふところと言えば、今は、神に全き主導権があるということです。実に、自分自身が全く御手の中にあることを知り、感じることは、深い霊的な体験です。

十八年にわたる総長職を終えるにあたって、まず、そして何にもまして、主に感謝を捧げたいと思います。私に対する主の寛大さは限りないものでした。私としましては主の賜物はすべての会のためであると心得、一人ひとりのイエズス会員とわかち合えるように応えようとしてまいりましたが、これが、私のたゆまぬ努力でした。

この十八年間、私の一つの想いは、心を尽くして、終始、主と主の教会に仕えることでした。私は、会において目の当たりにしてきた大なる進歩のゆえに、主に感謝いたします。明らかに、私自身をはじめとして、欠点もあつたでしょう。しかし、個人的な回心において、使徒的活動において、貧しい人びと、難民への関心において、大なる進歩があつ





たことは依然として事実です。特に、ここ数年、教会と教皇に対して示された忠実な、子としての従順な態度については、特別に言及しておかなければなりません。このすべてのために神に感謝いたします。

私に、親しく協力して下さった方々、オキーフ神父をはじめ、総補佐や顧問の方々、地域担当補佐、本部の皆様、管区長方には特に感謝したいと思います。また、教皇からの異例の職務に任じられると、教会とイエズス会のために労を惜しまず応えて下さった、デッツア神父とピタウ神父には心から感謝いたします。しかし、何事にもまして、感謝の意を表したいのは、イエズス会全体、兄弟である、一人ひとりのイエズス会員に対してです。彼らが、この微力な総長に、信仰による従順を示してくれなかったら、何事も成し遂げえなかったでしょう。

今日、皆様をお願いしたいことは、主のために役立つものであってほしいということです。神を中心に据え、いつも御声に耳を傾け、絶えずより効果的な奉仕のためには何をすることができるかを尋ね、愛と全き不偏心をもって、力の及ぶ限りそれを実行いたしましょう。神の实在に気づくよう、一人ひとりがその意識を培いましょう。

皆様の一人ひとりに、特別に“tantas cosas”（言いたいことはたくさんあります）と言いたいと思います。

若い会員には、将来への最良の準備として神の現存に生き、聖性のうちに成長するようにと願っています。恐れ多いと同時にごく親しみ深い神の意志に自ら全面的に委ねられますように。

使徒的活動に脂がのって精を出している人たちには、働きすぎて疲れ切ってしまうないように頼みます。世界に必要なものを見、神を知らない、あるいは知らないように振る舞っている数百万の人々を思い、自分の生活の中心を仕事ではなく、神にすえて適切なバランスを見出してください。すべての人は神を知り、神に仕えるように招かれています。私たちには、なんと素晴らしい使命——すべての人がキリストを知り、愛せるよう助け導くこと——が委ねられていることでしょう。

私のような年輩の人たちには、開かれた心でいるようにと力説いたし



ます。今、何をしなければならないのかを学び、それを熱心に行いましょう。

ブラザーの方々にも、深い情愛をこめて“tantas cosas”と言いたいと思います。全イエズス会にブラザーの重要性を思い起こしてもらいたいと思います。彼らの助けによって、私たちの召命は神を中心とするものになっているのです。

私は、イエズス会が地上でのキリストの代理者、ローマ教皇のもとに唯一の主と教会に仕えているのを見て、希望に満ちています。イエズス会がこの道を進み続け、そして神が司祭、ブラザーへの多くのふさわしい召命をもって、私たちを祝福してくださいますように。このために、私の人生の残りを、私の祈り、病気による苦しみを主に捧げます。自分のために望むことは、ただ心の底から次のように繰り返すことだけです。

「主よ、私の自由を、私の記憶、理性、すべての意志、私がかもっているものをすべて受け取ってください。あなたがくださったのですから、主よ、それをお返しいたします。すべてはあなたのものです。お望みのままにしてください。ただ、あなたの愛と恵みをお与えください。それだけで、私は満ち足りています。」

この手紙は後に“tantas cosas”と題されて公にされ、イエズス会員の心を打つメッセージとなった。



## “nunc dimittis”



(ラ・ストルタ小聖堂)

1984年9月4日、アルベ神父は総長職を辞するにあたり、ラ・ストルタを訪れた。ここにはローマから10数キロ離れたカッシア街道沿いに小さな聖堂がある。イグナチオとライネス、ザビエルがベネチアからローマに向かう途中立ち寄った聖堂で、ここで祈ったイグナチオは不思議なビジョン(示現)を見た。それは十字架を背負ってよろよろになりながらゴルゴタの丘を登るイエスの姿で、そのイエスから「わたしに従いなさい」という声が聞こえた、というものであった。この神秘的なビジョンをとおして、イグナチオは自分たちが創立する修道会を「イエスの伴侶」(Compania de Jesus)と名づけることに決めたといわれている。アルベ神父は総長に就任して後、この小聖堂修復し、イエズス会という名前の原点であるイグナチオのビジョンを思い起こすように努めた。その場所を訪問して行った短い説教は、“nunc dimittis”(今こそ去らせていただきます)といわれる祈りの言葉に言及して語られた。





“nunc dimittis”は、修道院で唱えられる寝る前の祈りの賛歌で、幼子イエスをエルサレムの神殿で見つけ、腕に抱いて言った老シメオンの言葉から取られたものである（ルカ福音書2章29節参照）。この説教の一部をそのまま引用してみる。アルペ神父の最後の語りを私たちの心に響かせることができるからである。

イエズス会総長としての職を辞するにあたり、ここラ・ストルタに来て、現在の健康状態のため沈黙のうちではありますが、私の“ヌンク・ディミッティス”（今こそ去らせてくださいます）を歌うことは、いろいろの点で時宜にかなっています。

老シメオンは奉仕の長い生涯を閉じる時、エルサレムの神殿の壮麗な輝きのうちに、幼子イエスを腕に抱き、旨に引き寄せ、熱烈な望みを遂げました。イグナチオ・ロヨラは、このラ・ストルタのつづまやかな聖堂で、イエズス会の創立者、初代総長として、奉仕の新しい生活を始めようとしていた時、キリスの御心に引き寄せられるのを感じました。おとめマリアへの熱心な祈りに応えて、「父なる神は、彼を御子キリストと一緒に置いてくださいました」。


私は、決して自分自身をこの二人の優れた主の僕と比べようとしていたわけではありません。しかし、確かに私はラ・ストルタでイグナチオの体験にいつもでも大いなる信心をもってきましたし、旅路の終わりに、この聖なる場所で神に感謝を捧げていますと、大いに慰められます。「私は、この目であなたの救いを見たからです」。この十八年の間になんとしばしば、神が「私はローマであなたに恵みと助けを与える」という約束に忠実であることを、確認させられてきたことでしょう。

【中略】

「私は恵みと助けを与える」という約束の言葉が私たちにあるのはライネス神父が語ってくれたからですが、彼はさらに説明を続けて、イグナ







チオは、その言葉が彼と仲間は苦しみに会うことはないという意味では理解しなかったと言っています。逆に、イグナチオは、自分たちは十字架を背負ってキリストに仕えるように召されたのだと確信していました。「彼は、キリストが十字架を背負い、その傍らで永遠の御父がキリストに向かって、「私はこの男をあなたの僕として選ぶのを望む」と言い、それからキリストがイグナチオに向かって、「私はあなたが私たちに仕えることを望む」と言って彼を選ぶのを見ました。この示現のために、彼は聖名に対して大いなる信心を抱き、自分たち仲間の共同体を「イエズス会」と名付けようと望んだのです。」

【中略】

ラ・ストルタの体験はイグナチオにとって、回心以来いただいてきた多くの特別な恵みの頂点であり、ようやくでありました。そして、イエズス会にとっては、会を生みだした聖霊の導きに忠実に留まる限り、創立者の恵みにあずかるだろうという保証でした。私にとってお別れであり締めくりであるこのミサ聖祭が、皆様とここに代表されている全イエズス会にとっては、新たな熱意に燃えた奉仕の新しい出発になるよう祈ります。

アルベ神父は、聖イグナチオのラ・ストルタのビジョンとその意味を語り、「イエズス会」という名称の原点に立ち返って、これからのイエズス会がなすべきミッションに全会員が立ち向かっていくようにと励ました。そして、聖イグナチオの生涯の歩みを自らの生涯に重ね合わせて、“nunc dimittis”（今こそ去らせてくださいます）の祈りを捧げたのである。

その後、8年間、アルベ神父が公に語ることはなかった。



病床生活のアルペ神父を見舞った二人の日本人会員のエピソードを紹介したい。ひとは、グレゴリアン大学で神学の博士号を取得するために留学していた神父で、もうひとは、60歳を過ぎてイエズス会に入会したブラザーである。どちらとも共通していたのは、入会許可をアルペ総長から直接いただいたということである。

留学中の神父は20代のころ、「道」を探し求める青年であった。禅の修行を積み、プロテスタントの牧師との出会いから洗礼を受け、ヨーロッパ中世の思想のなかでも神秘主義に関心を持つようになると、誰か専門家はいないかと上智大学構内にあるSJハウスを訪ねた。そこで出会ったのは、自ら禅の修行を行い、聖イグナチオの霊性を深く研究し、アルペ神父のもとで修練を行った神父であった。そうした出会いからイエズス会入会を志してカトリックに改宗したのだが、修道会に入るには少なくとも3年の期間を経ていることが条件であった。しかも堅信の秘跡をまだ受けていなかった。それにもかかわらず、アルペ総長は特別に入会許可を与えた。「月足らずの私が入会を許された」と彼は言う。偶然にも私とは修練が同期で、まだ堅信を受けていないというので、私が代父となって、職町教会でその秘跡を無事受けたことを思い出す。そんな背景があったことを私は知らなかった。

ブラザーの方は、結婚もし、子どももいたし、孫もいた。妻に先立たれ、その後は深い信心生活を送っていたが、ブラザーとしてイエズス会に入会することを強く望むようになった。しかし、60歳を越えており、入会するにはかなりの高齢であったのだが、アルペ総長は許可を与えた。このブラザーとは長束での修練時代、1年ほどいっしょに過ごし、神学院でもいっしょだった。深いマリア信心の持ち主で、修練中、つらいことがあると必ずマリア像が安置されていたグロットに行って祈った。「俺は106歳まで生きることになっている」と言っていたが、103歳で亡くなった。

この二人が病床にあるアルペ神父を訪ねた。「入会許可の手紙を神父さまから直接いただいた者です」とあいさつした。すでに動くことも話す



こともままならない状態であったが、「そうです。そうです」という素振り  
を示したという。アルペ神父が世界中のイエズス会員を知っていたわ  
けではない。しかし、日本から来たという会員には特別な思いをもつて  
いたのであろう。



(山岡三治神父と Br. 山下清次郎)

病床での生活を静かに送り、1991年2月5日、アルペ神父は最期の  
時を迎えた。日本を愛し、日本の教会のために生涯を捧げ、何よりも日  
本二十六聖人の殉教の出来事を心に留めて、自らの信仰の支えとしてき  
たその殉教者の記念日に、静かに天に召されていった。スペインのビル  
バオから始まり、ヨーロッパ、アメリカの各地を経て、日本に到り、ロー  
マに赴き、そこで命尽きるまで教会とイエズス会に奉仕したアルペ神父  
の巡礼の生涯が静かに終わったのである。

“Servant of God” (神に仕えた人)。2018年11月14日にアルペ  
神父の列聖調査が正式に開始された。この称号は、列聖調査が開始され  
た人に与えられる。アルペ神父はまさにその通りの人であった。




## あとがき

---

2018年7月12日、ビルバオで国際イエズス会大学連盟の会議が行われた。この会議に招かれたアルトゥーロ・ソーサ総長は、ミサの説教の中で、ペドロ・アルベ神父の列聖査の開始を公に宣言した。このニュースを聞いて、私は、「やっと始まったか・・・」という思いであった。彼の列聖を求める声は以前からあった。聖イグナチオ教会のなかでは、アルベ神父とのゆかりをもつ信徒たちが、彼が亡くなった年から、「アルベ神父を語る会」を始めている。広島のみ園カトリック教会は、長束修道院との深いつながりを持ち、修練長時代のアルベ神父を知る信者も多く、列聖を求める運動を熱心に行っていた。今でも命日の2月5日には、毎年集いを開き、アルベ神父を偲んでいる。私の母も生きていれば、このニュースを聞いて喜び、アルベ神父の聖性を喜んで証言するひとりになったであろう。この年の11月14日、アルベ神父がこの世に生を受けた日であるが、バチカン教皇庁が正式に列聖調査を開始することを宣言した。

これから、アルベ神父に関連するさまざまなことが集められることになる。「アルベ」という名前を冠した建物や集いなども、なぜそのように命名したのかという理由書を提出すれば、証言資料になるという。今のところ日本では、広島学院の講堂が「アルベ講堂」と名づけられ、上智大学の学生寮が「アルベ国際学生寮」となった。もともと、日本での宣教のために来日した若い宣教師の日本語学習のために設立された鎌倉十二所の日本語学校は、その後、黙想の家となり、現在は、難民センターとして使用されているが、「あるべ難民センター」と名づけられた。アルベ神父は社会正義のための行動として最初に“refugee service”に取り組んだが、その思いを受け継ぐものとして強く意識されてのことであった。他の国では、神学院や学校、教育施設に多く使われている。こうした命名もアルベ神父の聖性を示すものとして評価されるのである。

このささやかな物語は、このような調査を意識したものではまったくない。私はただ、アルベ神父を直接知る者が少なくなるなかで、直接知



らない者がアルペ神父をどのように語り続けるかを試みただけである。極めて大切な、忘れてはならない出来事には必ず語り部を必要とする。戦争、災害、事件などはそうである。直接知らない世代になると、風化させてはならないという声が起こってくる。しかし、いつしか忘れられていくということも事実である。そうであれば、残された資料をとおして読み解き、その意味を、その時代にふさわしく語らなければならない。私は、イエズス会員として、アルペ神父はそうしなければならない人であると思っている。その思いのゆえに、この物語を書いただけである。

2024年2月5日  
日本二十六聖人殉教者記念日  
ペドロ・アルペ神父命日



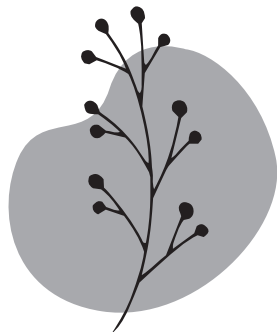
## 参考文献

本文中に記した以外に、参考させていただいた文献は以下のものである。

『日本のイエズス会史』 再渡来後、1908年から 1983年まで  
編者 パウロ・フィステル イエズス会 日本管区 昭和 59 年

『アルペ神父回想記』 —第二版—  
元イエズス会総長アルペ神父の列福を祈る会 2010 年

『一イエズス会士の霊的な旅』  
—ジャン・クロード・リーチ S.Jとの自伝的対話—  
ペドロ・アルペ著 緒方隆之訳 教友社 2015 年



## 上智学院カトリック・イエズス会センター

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

TEL 03 (3238) 4161

E-MAIL catholic-co@sophia.ac.jp

Web <https://sophia-catholicjesuit.jp/>

場所 2号館1階

開室時間 9:00 ~ 11:30 / 12:30 ~ 17:00

第1版 2024.4.1

